

岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第52集

小堀内王遺跡発掘調査報告書

田老大规模作金保葬基地関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター

岩手県 福一社 部

小堀内 I 遺跡発掘調査報告書

田老大规模年金保養基地関連遺跡発掘調査

序

より豊かな生活の実現を目的とした地域開発事業の促進は、本県にとって重要な課題となっております。一方、これらの開発事業に関連して私たちには、先人が長い歴史の中で培いはぐくんできた貴重な文化遺産を保護し、新たな文化創造の糧とし活用していく責務があります。

この報告書は県が年金福祉事業団から委託をうけて事業をすすめることになった田老大規模年金保養基地に関連する小堀内Ⅰ遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。

基地内における埋蔵文化財の取り扱いについては、県教育委員会と県福祉部との間で、文化課が実施した分布調査、試掘調査結果にもとづいて協議がなされ、その調整と指導によって昭和56年度に県福祉部から委託をうけ当センターが発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代早期、前期にかかわる土器、石器が多数出土し、県北部陸中海岸地方における縄文時代文化を解明する貴重な資料を提示することができました。

この報告書が研究者のみならず広く一般のかたがたも活用され埋蔵文化財についての理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後にこれまで発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力いただいた年金福祉事業団、県福祉部、田老町役場をはじめ関係各位に心から感謝を申し上げます。

昭和58年 3月

(財) 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新里 盈

目 次

<p>序</p> <p>緒言</p> <p>I. 調査に至る経過…………… 1</p> <p>II. 調査・整理の方法…………… 3</p> <p> 1. 調査の方法…………… 3</p> <p> 2. 整理の方法…………… 3</p> <p>III. 遺跡の環境…………… 4</p> <p> 1. 地形と立地…………… 4</p> <p> 2. 周辺の遺跡…………… 5</p> <p> 3. 基本層序…………… 6</p>	<p>IV. 遺構と遺物…………… 9</p> <p> 1. 検出された遺構…………… 9</p> <p> 1) 炭窯跡…………… 9</p> <p> 2) 土坑…………… 9</p> <p> 3) 焼土の痕跡…………… 7</p> <p> 2. 出土した遺物…………… 10</p> <p> 1) 土器…………… 10</p> <p> 2) 石器…………… 15</p> <p>V. まとめ…………… 19</p> <p>参考文献…………… 21</p>
---	---

図 版 目 次

<p>図版 1 遺跡位置図…………… 2</p> <p>図版 2 周辺の遺跡…………… 5</p> <p>図版 3 遺構配置図…………… 7</p> <p>図版 4 土器片グリット別出土量…………… 11</p> <p>図版 5 B5q14 炭窯跡…………… 22</p> <p>図版 6 B5r13、B5r14、C6g02 土坑…………… 23</p> <p>図版 7 土器実測図…………… 24</p> <p>図版 8 土器片拓影図 1…………… 25</p> <p>図版 9 土器片拓影図 2…………… 26</p> <p>図版 10 土器片拓影図 3…………… 27</p> <p>図版 11 土器片拓影図 4…………… 28</p> <p>図版 12 土器片拓影図 5…………… 29</p> <p>図版 13 土器片拓影図 6…………… 30</p> <p>図版 14 土器片拓影図 7…………… 31</p> <p>図版 15 土器片拓影図 8…………… 32</p> <p>図版 16 土器片拓影図 9…………… 33</p> <p>図版 17 土器片拓影図 10…………… 34</p> <p>図版 18 土器片拓影図 11…………… 35</p>	<p>図版 19 土器片拓影図 12…………… 36</p> <p>図版 20 土器片拓影図 13…………… 37</p> <p>図版 21 土器片拓影図 14…………… 38</p> <p>図版 22 石器実測図 1…………… 39</p> <p>図版 23 石器実測図 2…………… 40</p> <p>図版 24 石器実測図 3…………… 41</p> <p>図版 25 石器実測図 4…………… 42</p> <p>図版 26 石器実測図 5…………… 43</p> <p>図版 27 石器実測図 6…………… 44</p> <p>図版 28 石器実測図 7…………… 45</p> <p>図版 29 石器実測図 8…………… 46</p> <p>図版 30 石器実測図 9…………… 47</p> <p>図版 31 石器実測図 10…………… 48</p> <p>図版 32 石器実測図 11…………… 49</p> <p>図版 33 石器実測図 12…………… 50</p> <p>図版 34 石器実測図 13…………… 51</p> <p>図版 35 石器実測図 14…………… 52</p> <p>図版 36 石器実測図 15…………… 53</p>
---	---

写真図版目次

写真1	遺跡全景、調査風景……………54	写真16	土器片11……………69
写真2	遺物出土状況、深掘断面……………55	写真17	土器片12……………70
写真3	B5q ₁₄ 炭窯跡、B5r ₁₃ 土坑……………56	写真18	土器片13……………71
写真4	B5r ₁₄ 土坑、C6g ₁₂ 土坑……………57	写真19	土器片14……………72
写真5	土器……………58	写真20	石器1……………73
写真6	土器片1……………59	写真21	石器2……………74
写真7	土器片2……………60	写真22	石器3……………75
写真8	土器片3……………61	写真23	石器4……………76
写真9	土器片4……………62	写真24	石器5……………77
写真10	土器片5……………63	写真25	石器6……………78
写真11	土器片6……………64	写真26	石器7……………79
写真12	土器片7……………65	写真27	石器8……………80
写真13	土器片8……………66	写真28	石器9……………81
写真14	土器片9……………67	写真29	石器10……………82
写真15	土器片10……………68		

I. 調査に至る経過

田老大規模年金保養基地建設にかかわる埋蔵文化財包蔵地の分布調査は、昭和49年5月に県教育委員会文化課によって行なわれている。その結果にもとづき県福祉部と文化課において埋蔵文化財の取り扱いについて協議が重ねられた。

昭和53年度に入り発掘調査を前提とした基地内地形図の複製を縮尺1:500、1:1000で行なうと共に基準測量と杭打ちを文化課で実施した。

昭和54年度には7月末から1ヶ月にわたり基地内約27haを対象に先の分布調査結果をもとに、遺跡範囲、遺跡内容の概要把握を目的として試掘調査を文化課において実施することになり当センター職員2名が調査員としてその任に当たった。

試掘調査の結果5遺跡が確認されており、本報告書にかかわる小堀内Ⅰ遺跡について要約すれば次の様に報告されている。

「調査地域の中で最も見晴しのよい標高148mの小高い丘で、東に向かってゆるやかに傾斜し広がっており、前方に海が展望できる。かつて草地として利用され、草地造成時に表土の移動があったと推定される。この丘の平坦面から緩斜面に変わる縁辺部周辺に竪穴住居跡5棟、その他、土坑、陥し穴状遺構が検出された。遺物は縄文時代早期、前期の土器片、石器類が広範囲に散布しており縄文時代早期から前期にかけての集落跡であり遺跡面積は9,000㎡と推定される。」となっている。

その後、小堀内Ⅰ遺跡を含む小高い丘が基地内施設としてのホテル建設の予定候補地となり昭和56年8月から県福祉部の委託をうけ当埋文センターが発掘調査することになった。調査区域は、54年度の試掘調査の結果により遺構が検出された東側縁辺部は現状保存に配慮することになり、遺物が出土した西側平坦面約3,000㎡について調査範囲とした。



図版1 遺跡位置図

Ⅱ．調査・整理の方法

1. 調査の方法

(1) 調査区の設定

調査区は、田老大規模年金保養基地埋蔵文化財調査に伴い、アジア航測K・Kが行なった基準点測量から得られた資料を基に設定した。

まず、測量点C 6 (X=-22,700m、Y=97,900m、H=144,064m)を基点に、その四方各100mを大グリットとし、北西部をB 5区、北東部をB 6区、南西部をC 5区、南東部をC 6区と呼称した。つぎに、各大グリットを東-西、南-北に5m毎のメッシュを組み、東西には西から01~20、南北には北からa~tのアルファベットを付し小グリットとした。したがって、グリットの呼称は、B 6 in、C 5 a20のようになる。

(2) 遺構名

検出した遺構には、遺構の北端部が位置するグリット名を付し遺構名とした。

(3) 粗掘りと遺構の検出

現表土は、まず、人力によって10m四方を幅1mのトレンチ掘りを行ない、遺構検出面を確認し、ついで、陥所に土層観察断面を残しながら全面を重機で剥いだ。その後、鋤簾等で遺構の検出を行なった。この段階では、竪穴住居址の検出はなかったため、さらに、全面約20cmの掘下げを行なった。そして、遺物の出土の多いグリットについては、10~20cmの掘り下げを、他のグリットについては、幅1m四方、深さ約80cmのトレンチ掘りを行ない、遺構の有無の最終確認を行なった。

(4) 精査と実測

炭竈跡は四分法、土坑は二分法で精査した。平面図、土層断面図は20分の1の縮尺で実測、平面図の実測は遺り方測量で行なった。

(5) 出土遺物の取り上げ

出土遺物は、平板測量によって、グリット毎に出土位置、レベルを記録した。

2. 整理の方法

(1) 本文の記述

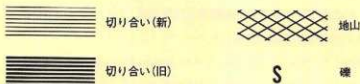
発掘調査の過程で、遺跡から得た情報を基に、フィールドカード等に集積した記録、遺構、遺物の整理の段階で得た資料にもとづき記述した。

(2) 遺構図

遺構配置図は、200分の1の縮尺で作製し、本書には、縮尺不定で載せた。各遺構図は、野外調査で作製したものをトレースし、60分の1の縮尺で載せた。方位は、「天」を北としたが、

図版中に方位マークでも示した。

なお、図版中のスクリーンパターンは次のものを使用した。また、焼土、炭化材等については、類例を図版中に示した。



(3) 出土遺物

遺物の出土は、かなりの量にのぼったが、報告書の紙数の都合上、すべての遺物を掲載することはできなかった。したがって、遺物の実測図、拓影図、写真はできるだけ類例化を図り、その中から代表的なものを抽出し報告した。

1) 土器

土器片は、約5,800点出土した。実測されたものは、2点のみである。他については、破片である。これらの中から、口縁部の破片だけ約750点を抽出、拓本と断面実測を行なった。

ほぼ、復元できた1点については、2分の1に縮尺して実測、報告書には、4分の1に縮尺、破片の断面図は実物大でトレースし、2分の1の縮尺で載せた。

2) 石器

石器は、552点出土した。トレースは実物大で行ない、報告書には、器種により3分の2、2分の1、3分の1等に縮尺し載せた。

Ⅲ. 遺跡の環境

1. 立地および地形

本遺跡は、下閉伊郡田老町の北部に位置し、国鉄宮古線田老駅に接する国道45号線を約7km北上、田老町立田老第三小学校小堀内分校より東へ約1kmの地点に所在する。

また、当地域は、南北に走る北上山地の北東部に位置し、遺跡は、この北上山地の東縁より太平洋に注ぐ栴待川、青野滝川に挟まれた海岸段丘奥の東緩斜面にある。標高は143～145mである。そして、遺跡の周辺は、いわゆる陸中海岸の一部であり、海岸段丘の発達地帯でもある。これらの海岸段丘は、標高120～180mで開析が著しく段丘が消滅し、海食台地を形成している。さらに、山地の東の山麓には、大館山、刺柄岳、原地山等の標高400～500mの山が連なっている。これらの山間を田老川、栴待川、青野滝川等が東走、太平洋に注ぎ、その流

域に僅かの平地を形成している。したがって、当地域は、平地が少なく、土質そのものも黒ボクが発達しにくく、農耕地としての条件には恵まれているとはいいがたい。

そのため、人々の生活の場としては、第二次世界大戦前は木炭の生産地として利用されるにすぎず、戦後において本格的開拓が始まり、半農半漁の生活が営まれている。農業においては、地形等から水田耕作には適さず、主に畑作中心で麦、蕎麥等の栽培地として開拓され、その後、採草地に変っている。しかし、農業以前の生活の場としては、山海共に近く、地形等においても絶好の地といえよう。

2. 周辺の遺跡

当遺跡周辺における縄文時代早・前期に関連する遺跡は、県教育委員会文化課の遺跡分布調査によると、昭和55年度現在、13遺跡を数える。これらは、いずれも未発掘の遺跡であるが、そのうち、集落跡が遺存する遺跡として、水沢Ⅰ、向新田Ⅺ、Ⅻ、青野滝Ⅴ、Ⅳの5か所である。さらに、早期の集落を含むと推定される遺跡として水沢Ⅰ遺跡が挙げられる。

なお、寺山遺跡については、すでに破壊されており、上記以外の遺跡については、竪穴住居址の有無は未確認である。これらの遺跡の立地を概観すると、いずれも、海岸段丘べりから段丘奥にかけての緩斜面に位置している。



0260	水沢Ⅰ遺跡	◇
0271	水沢Ⅱ	◇
1027	向新田ⅩⅤ遺跡	◇
1034	向新田ⅩⅥ	◇
1169	向新田ⅩⅡ	◇
1290	向新田ⅩⅠ	◇
0110	小堀見内Ⅰ	◇
0144	物見内Ⅲ	◇
0396	青野滝Ⅳ	◇
0379	青野滝Ⅴ	◇
0393	青野部Ⅴ	◇
2265	寺山Ⅴ	◇
1184	山田	◇
1026	古	◇

図版 2 周辺の遺跡(縄文時代早・前期)

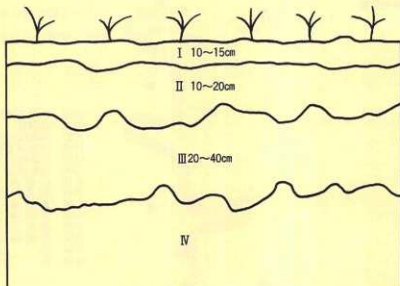
3. 基本層序

遺跡周辺の段丘面は、かなり開析が進んでおり、当遺跡の位置する段丘面も原面の保存は良好とはいえないようである。しかも、前述のように調査区内は、畑地造成の際、二度にわたってかなりの量の旧表土が剥ぎ取られている。

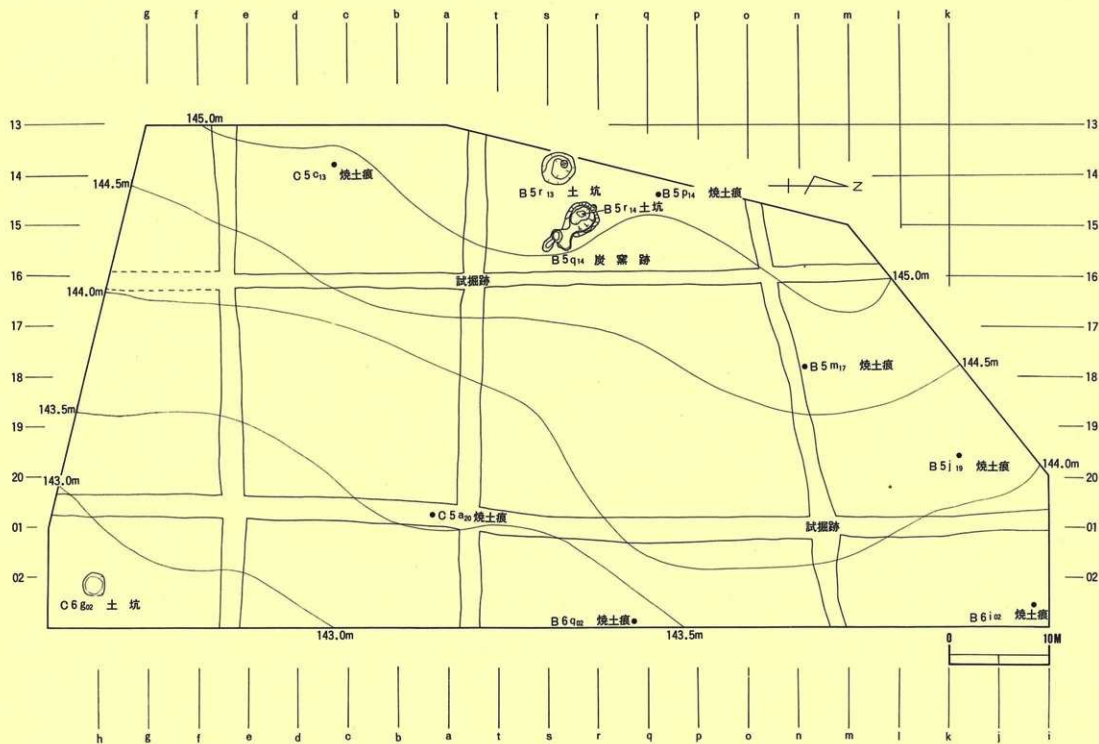
調査では、南北にグリッド設定の基点C6より西側10m、東西に南側10m および北側20mの地点を3m間隔で深掘りを行なった。その結果、第Ⅱ層には、下記のような混入物のほか、黒褐色気味の土塊が混入、しまりにも欠けており、当層までが畑地造成の際の攪乱と思われる。

下図は、基点C6より北側20m地点を東西に掘った断面図の一部を模式化したものである。

- I層 Hue7.5YR $\frac{5}{6}$ ~10YR $\frac{5}{6}$ 暗褐色土 現表土。シルト層で軟かく、ほとんど粘性がない。炭化物粒等が混入する。層厚は10~20cm。
- Ⅱ層 Hue7.5YR $\frac{4}{6}$ ~10YR $\frac{4}{6}$ 褐色土 シルト層で軟かく、ほとんど粘性がない。草根、枯れた木根皮が混入する。ほとんどの遺物は当層に含まれる。層厚は10~20cm。
- Ⅲ層 Hue7.5YR $\frac{5}{6}$ 明褐色土 粘土質シルト層でⅡ層に比して若干しまりがある。微量の枯れた木根皮が混入。層厚は20~40cm。
- Ⅳ層 Hue10YR $\frac{5}{6}$ 黄褐色土 ローム層で硬くしまっている。粘性がある。混入物はみられない。



基本層序模式図



图版3 小堀内I遺跡遺構配置図

Ⅳ. 遺構と遺物

緒言でも述べたが、当遺跡は、昭和54年度に岩手県教育委員会文化課によって試掘調査されたところである。この調査では、縄文時代の竪穴住居址が数棟および縄文時代の遺物が多数埋蔵されていることが確認されている。

今回の調査は、そのうち、前回竪穴住居址が確認されなかった小堀内Ⅰ遺跡の一部である段丘奥の東向き緩斜面に限定して行なったものである。したがって、調査前においてもある程度、竪穴住居址については検出されない可能性もあると予測していた。実際、調査の結果においても竪穴住居址は検出されなかった。しかし、遺物については、縄文時代早・前期の土器片、石器が多量に出土した。

1. 検出された遺構

検出された遺構は、炭窯跡1基、土坑3基、焼土の痕跡7か所である。

1) 炭窯跡

B5q₁₄炭窯跡 (図版5、写真3)

調査区西端の中央部の比較的平坦地から検出された。B5r₁₃土坑とは隣接する。また、B5r₁₄土坑を切っている。

当炭窯跡は、本体(窯部)と付属する施設(焚口部、灰捨場)からなっている。本体の平面形は、馬蹄形を呈している。規模は、長軸約4.0m×短軸約3.2mを測る。検出面からの掘り込みは深いところで約0.7m、浅いところで約0.3mを測る。したがって、底面は平坦ではなく、北西部寄りの底面が土坑状に凹んでいる。これは、凹んだ部分の直下にB5r₁₄土坑があり、当炭窯が構築された後、土坑の部分が沈下したものと考えられる。底面は地山を基盤にしている。埋土中には多量の焼土、炭化材、焼土と炭化材の混ったものが含まれていたが、これは、炭窯の底部に残存したものや天井部の崩落したものが堆積したと思われる。

壁は、長さ0.2~0.8m、幅0.35m、厚さ0.2mの焼成を受けた粘土ブロックが貼り付けられている。また、壁の頭部には、礫で囲った煙出し、横の両壁にも各1基ずつ補助的煙出しが付設してある。

焚口部は、浅い皿形の掘り込みがなされ、さらに、その南西端には、平面形が楕円形を呈する灰捨場と考えられる浅い土坑が2基付設されており、中に焼土と炭化材が多量に堆積していた。

当炭窯跡は、土取跡と思われるB5r₁₃土坑の埋土から出土したビールの空瓶、地元民の話し等から終戦直後まで使用されたものと思われる。

2) 土坑

B5r₁₃土坑 (図版6、写真3)

調査区西端の中央部に位置し、B5q₁₄炭窯跡と隣接する。規模は、開口部で3.3m×3.2mを測り、平面形は、ほぼ円形を呈する。検出面からの深さは、最深部で約2.7mを測る。壁は、北東側では垂直に近いが、西から南側に至るにしたがって螺旋状に立上っており、あたかも階段状を呈する。

当土坑は、B5q₁₄炭窯跡と隣接すること、壁の立ち上がりの状況、埋土が新しいこと、埋土中から出土したビールの空瓶のラベル等から、B5q₁₄炭窯を構築する際の土取り跡と考えられる。

B5r₁₄土坑 (図版6、写真4)

当土坑はB5q₁₄炭窯跡の直下で検出した。検出面 (B5q₁₄炭窯跡直下) での規模は、2.3m×2.0mを測る。壁の立ち上がりの状況で見ると、本来は、これより若干大きかったと思われる。平面形は、楕円形を呈する。深さは、炭窯跡の検出面から約1.5mを測る。埋土にほとんど腐蝕しない木の葉、炭化材が混入していたが、時期は不明である。

C6g₀₂土坑 (図版6、写真4)

調査区の南東端に位置する。規模は、2.3m×2.3mを測る。平面形は円形を呈する。検出面からの深さは、約0.8mを測る。壁は、垂直に近い立ち上がりみせる。底面は平担である。埋土中より縄文時代の土器片が数片出土したが、早期、前期のものが混在すること、埋土の中、上位からの出土であることから流れ込んだ可能性が高い。埋土は若干しまりに欠け新しい。

3) 焼土の痕跡 (図版2)

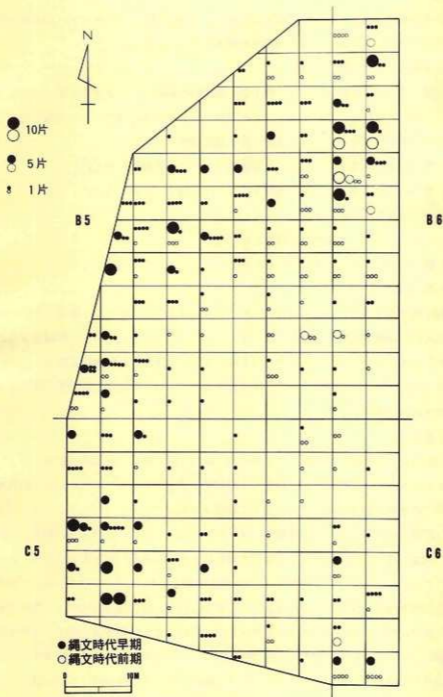
B5j₁₉、B5m₁₇、B5p₁₄、B6i₀₂、B6g₀₂、C5a₂₀、C5c₁₃のグリットより各1か所ずつ確認された。これらを焼土の痕跡としたのは、いずれも、直接焼成を受けた形跡はなく、わずかに赤褐色系の色調を呈していたからである。平面形は不整形を呈し、痕跡も検出面から1~2cmも掘り込むと消失する。したがって、これらの痕跡が、炉跡としての遺構か否かの確定はできなかった。ただ、遺物の出土状況との対比でみると、比較的遺物の出土の多い地域から検出されたとはいえる。

2. 出土した遺物

1) 土器

出土した土器は、すべて破片で総数5,818点にのぼる。そのうち、ほぼ復元できたものは1点で、他は数片ずつ接合されたものもあるが、器形の全容を知り得るものはなかった。これらの土器片は、若干の表採、基本層序第Ⅰ層 (現表土)、土坑への流込み等を除き、基本層序第Ⅱ層からの出土である。器種は、深鉢系が中心と思われる。

これらの中から、口縁部、底部および口縁部以外で、表裏両面に縄文のみられる破片等を抽



図版4 グリット別土器出土状況

出した。その結果、縄文時代早期に属するものは、口縁部510点、底部37点、同前期では、口縁部198点、底部1点である。他に時期等不明のものが2点ある。

これらを次のように分類した。

第Ⅰ群土器—縄文時代早期 第Ⅱ群土器—縄文時代前期 第Ⅲ群土器—時期等不明

さらに、第Ⅰ群土器は、底部を除き、器面調整、文様を中心に次のように分類した。

- a 類 刺突等を施文する前に縄文を施し器面調整したもの。
- b 類 刺突等を施文する前に、貝殻条痕によって器面調整したもの。
- c 類 a、b類のような器面の調整がなく、即、施文してあるもの。
- d 類 表裏両面に縄文を施してあるもの。

また、第Ⅱ群土器は、次のように分類した。

- a 類 口縁部にループ文を有するもの。
- b 類 a類を除いたもの。

第Ⅰ群土器で施文以外についてみると、胎土には、ほとんどのもので小礫混じりの砂粒が含まれ、さらに、繊維の含むものもみられ、特に、d 類では多く含んでいる。口縁部から口唇部上端にかけて薄くなり、外削ぎの形状を呈する。また、立上がりは外傾状に開く。

第Ⅱ群土器も、胎土に小礫混じりの砂粒を含むものが多い。繊維は、量の多少はあるが、すべてに含まれている。

〈第Ⅰ群土器〉

a 類 66点あり、本群土器の約13%を占める。縄目は浅く細い。縄は横回転で、 $R \left| \begin{array}{l} \perp \\ \perp \end{array} \right. , L \left| \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right.$ いずれもみられる。縄目の水平に走るものは捻糸文と思われる。同類は口唇、口唇端部、口縁部のつめ形等の刺突を中心に次のように分類される。

a¹ 類 (図版8-3~同9-22、写真6-3~同7-22) 口唇、口唇端部に刻み、口縁部につめ形の刺突を持つもの。これには、刺突の際の粘土瘤が器表面に盛り上がるか否かによる相違がみられる。さらに、つめ形の刺突には、縦、横形の組み合わせ、あるいは縦、横いずれかのもの、平行沈線等の文様と組み合わせたものもある。口唇、口唇端部の刻みは、篋状工具を右から左へ斜圧したもの、真上から押圧したもののほか、貝殻腹縁を押圧したものもある。

口縁部のつめ形は、縦形に刺突し、粘土瘤を持つものは左から右に向けて刺突するため右方に盛り上がり、横形の場合は、上から下へ向けて刺突するため、粘土瘤は下方に盛り上がっている。粘土瘤を持たないものも、縦、横形いずれの刺突方法もあり、粘土瘤を持つものと共通するようである。

a² 類 (図版9-23~同10-31、写真7-23~同8-31) 口唇、口唇端部に刻みを持つが、口縁部につめ形の刺突は持たないもの。これには、刺突以外の文様を併有するものとしな

のがある。併有する文様は平行沈線が多い。

a³類 (図版10-32、写真8-32) 口唇、口唇端部の刻みは持たないが、口縁部につめ形の刺突を持つもの。出土量は僅少である。刺突の方法は、a¹、a²類と同様である。

b類 259点あり、本群土器片中最も多く約50%を占める。調整としての貝殻条痕は、腹縁ないしは背面のものと思われる。条痕は、横、斜位さらに両者が混在するものもある。同類は、a類と同様の方法で次のように分類される。

b¹類 (図版11-33~同13-49、57、写真9-33~同11-49、57) 口唇、口唇端部に刻み、口縁部につめ形の刺突を有するもの。刻みはa¹類と同様である。口縁部につめ形の刺突もa¹類に近似し、縦形に刺突したものが多いが、小数であるが縦形で右から左へ向け刺突されているため、粘土瘤が左方に盛り上がっているものがある。また、ごくまれに、左上から右下に向かい斜位に刺突されたものもある。さらに、数点、指頭全体を縦形に刺突されたと思われるもの、平行沈線と組み合わせたもの、口唇、口端部の刻みに貝殻腹縁を刺突したのものもある。

b²類 (図版13-50-56、58~同14-69、写真11-50-56、58~同12-69) 口唇、口端部に刻みを持つが、口縁部にはつめ形の刺突を持たないもの。これらには、つめ形の刺突以外の文様を併有するものもないものがある。前者は、貝殻沈線等のほか、円孔を穿ったものが数点みられる。円孔は、粘土瘤の状況より、表から裏、裏から表へ向って穿つもの両者がある。

b³類 (図版14-70、写真12-70) 口唇、口唇端部に刻み、口縁部の文様ともに持たないもの。出土量は少ない。

c類 185点あり、本群土器片の約36%を占める。同類を、a、b類と同様の方法で次のように分類される。

c¹類 (図版15-71~同16-86、同17-105、写真13-71~同14-86、同15-105) 口唇、口唇端部に刻み、口縁部につめ形の刺突を持つもの。両者の施文方法はa、b類と同様であるが、1点で横位同列に縦、横形のつめ形を交互に刺突している。また、他の文様との組み合わせもa¹、b¹類に近似するが、貝殻の腹縁に近い背面を押圧したと思われるものが2点、割箸状の工具の先端を横位に刺突したと思われるものが1点ある。なお、口唇端部内面に、貝殻腹縁文、口縁部同面に縦形のつめ形刺突を持ち、波状口縁を呈するものが1点ある。

c²類 (図版7-2、同16-87~同17-104、同17-106~同18-108、写真5-2、同14-87~同15-104、同15-106~同16-108) 口唇、口唇端部に刻みを持つが、口縁部につめ形の刺突を持たないもので、口縁部の文様の有無によって細分される。口唇端部の刻みに貝殻腹縁を用いたものもある。口縁部に文様を持つものには、棒状工具による平行沈線、格子目、割箸状の工具の先端を刺突したものの、貝殻の腹縁に近い背面を押圧したもの等がみられる。

c³類 (図版18-109~113、写真16-109~113) 口唇、口唇端部、口縁部いずれにも施文

されないもの。

c⁴類 (図版18—114～115、写真16—114～115) 外面では、口唇端部に平行沈線、口縁部に、格子や斜格子目の文様が施され、内面にも、口唇端部に斜格子目の文様が施されている。器形は、外面が、口唇まで急角度で外傾して立ち上がり、内面は、口縁部で内彎している。口唇部は内削ぎされた形状を呈する。2点だけの出土である。

c⁵類 (図版19—123～124、写真17—123～124) 内外両面に縄文を施してあるもので、2点だけ出土した。胎土には、砂粒および繊維が混入しているが、繊維は本群土器片中最も多い。2点とも、体部付近の破片と思われる。外面の縄目は羽状を呈する。

なお、本群に属する底部は、先端が残存するもので37点確認した (図版18—116～122、写真16—116～122)。形状はいずれも砲弾形を呈する尖底である。先端からの立上がりは、直線的なもの、若干脹らみを呈するものとあり、その角度にも若干の相違がみられる。なお、縄文、条痕等の明確な施文はされていない。

〈第Ⅱ群土器〉

a 類 (図版7—1、同19—125～134、写真5—1、同17—125～134) 口縁部に環 (ループ) を持つもので約20点出土した。この中に、底部付近を除きほぼ復元されたものが1点ある (図版7—1、写真5—1)。本器では、ループは、口唇に平行するように4帯付してある。これは、縄を閉じた末端だけでなく、連続して環をつくり、一度の回転で横位に付したと思われる。ループ文の施された下位から底部にかけては羽状の縄文が施されている。全体の器形は底部が欠損しているため不明であるが、立上がりは、底部付近より外傾しながら体部に至り、体部で直立し、再び外傾しながら口唇部に達する。口縁部は平縁で、口唇部は、若干外削ぎ気味である。胎土には、砂粒、繊維が含まれる。

他の破片では、ループ文はほとんど口唇に平行するが、液状口縁と思われるものでは、口唇に沿って付されたものと組み合わせたものが1点みられる (図版19—134、写真17—134)。これらのループは、前述の復元土器と同様の施文方法のものが多いが、縄の閉端のループだけを施したものもある。

また、これらの破片は、口縁部から口唇にかけてのものが多いため、他の文様については不明のものもあるが、同類から類推すると、いずれも羽状の縄文が施されていると思われる。口唇の形状は多様である。口縁部の立上がりも、直立に近いもの、外反、内彎気味のもの等がある。

b 類 (図版20—135～同21—163、写真18—135～同19—163) a 類を除く本群土器片を一括した。文様は、羽状の縄文、単節の縄文、組紐の回転文がみられる。口唇の形状、口縁部の立上がり、胎土の混入物はa類に近似する。

なお、本群に所属すると思われる底部が1点出土した(図版21-164、写真19-164)。これは、いわゆる網代痕を有しているが、痕跡から竹皮を編んだものと思われ、底部内面は、若干上げ底状を呈する。

時期の確定し得ないものとして、底部1点(図版21-164、写真19-164)、片口と思われるもの1点(図版21-165、写真19-165)出土している。前者は、規模、形状から小型の土器のものと思われる。後者は、取り付け部分より欠落したものであろう。断面でみると溝状を呈し、その溝は、先端に至るほど狭く、浅くなる。溝状になった両端縁上端には、つめ形の刻みを有している。内外両面には、棒状の工具でなめたような浅い条痕が走っている。胎土には、砂粒を含んでいるが、繊維はみられない。

2) 石器

出土した石器は、計552点である。さらに、若干の使用痕、加工痕と思われる痕跡が認められるものを含めると若干増える。これらは、グリット毎に粗密の差異はあるものの、調査区全域から出土している。出土は、土器と同様、すべて、遺構外の基本層序第Ⅱ層と若干が第Ⅰ層(現表土)からである。

器種は、石鏃、石槍、石匙、篋状石器、搔ないし削器、石斧(打製・磨製)、石錘、擦石、石皿状石器、凹石、敲石、「円盤状打製石器」と多種である。これらの中で、数的に最も多くかつ、特色的なものは、「円盤状打製石器」である。点数でみると269点あり、石器全体の約49%を占める。また、当石器は、数的に多いことのほか、形状、加工、調整においても特色的である。さらに、現在、出土例も多くはなく、筆者の知り得る限りでは、近似するものとして、青森県鷹架遺跡で29点、県内では、二戸市沢内B遺跡で1点出土しているにとどまる。

なお、当石器の名称について、上述の鷹架遺跡の報告書では打製石器と呼称しているが、沢内B遺跡では、特に名称を付していない。本報告書では、とりあえず、「円盤状打製石器」の名称で呼称するが、今後、多くの出土例を待ち、相当の名称が付されるべきだろう。

他の石器で、数的に多いものとして、擦石、石錘、搔・削器が挙げられ、少ないものとしては、打製石斧の1点がある。

石鏃

13点出土した。数的には少ないが、形状的には変化に富む。ここでは、形状的特徴から、無茎鏃をa類(図版22-1-8、写真20-1-8)、有茎鏃をb類(図版22-9-11、写真20-9-11)、柳葉形鏃をc類(図版22-12-13、写真20-12-13)と分類した。これらは、さらに以下のように分類されそうである。なお、石材は、珪質凝灰質泥岩、珪質泥岩等が用いられている。

a¹類(図版22-1-2、写真20-1-2) 基部がほぼ平坦で、縦長の二等辺三角形を呈する。

共に両面を比較的微細に加工、調整している。

a²類（図版22-3~8、写真20-3~8） 基部が凹状を呈する。ただし、基部の凹状が浅いもの、深いもの、基部から尖頭部にかけて直線的あるいは若干収まる側縁をもつもの、また、尖頭部の角度が鋭角なもの、鈍角なもの等の差異も認められる。加工、調整では、表面に第一次剥離面をそのまま残すものが多い。

b¹類（図版22-9、写真20-9） 有茎鏃で、肩部と基部が明確で、両面共に加工、調整が比較的緻密である。

b²類（図版22-10~11、写真20-10~11） 肩部と基部の境界が不明確で、b¹類に比して、加工、調整が粗雑である。

c類（図版22-12~13、写真20-12~13） いわゆる櫛葉形を呈する。加工、調整は粗雑である。

石槍（図版22-14、写真20-14）

1点出土した。基部が欠損している。両面共によく加工、調整されている。尖頭部先端が長軸線に対して左右対称ではなく若干片寄っている。石材は珪質泥岩を用いている。

石匙

16点出土した。そのうち、完形のは10点である。全体的に加工、調整は粗雑である。これらは形状的特徴から、次のように分類される。石材は、黒質珪質泥岩、珪質凝灰質泥岩、硬質凝灰質泥岩等が用いられている。

a類（図版23-15~20、写真20-15~20） 6点出土した（推定1）。主要刃部に対してつまみ軸線がほぼ直角に近い、いわゆる横型石匙である。細分すると、主要刃部がほぼ直線を呈するもの、若干の弧状を呈するもの、波状を呈するものがある。加工、調整は全体的に粗雑である。

b類（図版23-21~26、写真20-21~26） 9点出土した（推定4）。主要刃部に対してつまみ軸線がほぼ平行する、いわゆる縦型石匙である。細分すると、主要刃部が直線的なもの、弧状を呈するもの、波状を呈するもの等がある。加工、調整は、図版23-25、写真20-25に示した1点を除くと粗雑である。

c類（報告書には掲載せず） a、b類の中間的形状を呈するもの。1点出土しているが、刃部の大部分が欠損しているため、残存部からの推定である。加工、調整は粗雑である。

篋状石器

12点出土した。形状的に打製石斧とも近似するが、刃部が主として片面に重点をおいて加工、調整され、あたかも篋状を呈するのでこの名称を付した。形状的特徴から次のように分類される。石材は、主として、珪質細粒凝灰岩、硬質凝灰質泥岩を用いている。

a 類 (図版23-31~34、写真21-31~34) 刃部が比較的直線的なもの。4点出土した。加工、調整は概して粗雑である。細分すると、厚手のもの、薄手のものとある。

b 類 (図版23-35~同24-41、写真21-35~41) 刃部が弧状を呈するもの。8点出土した。加工、調整は概して粗雑である。a 類同様、厚手、薄手の両者がみられる。

石斧

19点出土した。これらを製作技法の点から分類すると、a 類(打製石斧)とb 類(磨製石斧)に分類される。b 類の中には、頭部だけ残存するものや、いわゆる擦切石斧として使用されたもの、また、おそらく破損したため再調整、再利用したと思われるものもあり、すべてが破損している。

a 類 (図版24-42、写真21-42) 1点出土した。刃部は弧状を呈し、若干刃こぼれが認められる。石材は輝緑凝灰岩を用いている。加工、調整は粗雑である。

b 類 (図版24-43~同25-59、写真21-43~59) 18点出土した。これらを、規模、形状から細分すると、両刃を形成し、比較的大型のもの、中・小型のものと片面を中心に磨き込み刃部を形成し大型、小型のもの、また、篋状を呈し比較的小型のもの(図版25-52、写真21-52)、さらに、擦切り技法によって製作された擦切石斧(図版25-57、写真21-57)等に分類される。

獲・削器 (図版25-60~同26-85、写真21-60~同22-85)

43点出土した。緻密には、両者は区別されるだろうが、ここでは一括した。規模、形状共に多様である。概して、加工、調整は粗雑である。刃部についてみると、1辺だけのものと2辺以上に形成されるもの、また、片面を中心に刃部を形成するものと両面から加工し、形成されるものがある。

この中で、珪質凝灰質泥岩を用いたもの(図版25-60、写真21-60)は、本器種中では大型で加工、調整が緻密に施されている。

これらの石材は、珪質凝灰質泥岩、硬質凝灰質泥岩が中心である。

石錘 (図版26-109~同27-138、写真22-109~同23-138)

43点出土した。これらはいずれも礫の長軸の両縁辺を打ち欠いている。石材は、主に安山岩、流紋岩を用いている。

石皿状石器 (図版28-149~152、写真23-149~152)

37点出土した。名称については、一般的にみられる石皿のようにいわゆる皿状を呈さず、平坦面の片面に磨痕が認められるために、石皿状石器としたものである。これらは、いずれも欠損しており、完形と思われるものはない。この中から大型で厚手のものを4点だけ報告したが薄く小型のものも多い。

石材は、砂質凝灰岩、凝灰質砂岩が主である。

凹石 (図版28-164~166、写真23-164~166)

3点出土した。礫の平坦面に1~2個の凹みがみられる。この中の2点では両面に凹がみられる。石材は、軟かい凝灰質砂岩を用いている。

敲石 (図版28-169、同29-167~168、写真23-167~169)

3点出土した。この中の1点では、長軸稜線部に擦痕も認められる。また、1点は、欠損している。石材は、安山岩質凝灰岩、粘板岩を用いている。

擦石

87点出土した(前述の敲石の1点も含む)。礫の原形は、短軸断面でみると三角形、ないしは三角形に近い形状を呈するものが多い。擦痕は、長軸方向の稜線に相当する部分にみられる。完形で出土したものは少なくほとんど一部が欠損している。これらの接合を試みたところ、B5i₂₀、B6p₂₂とC5f₁₄、C5f₁₆の各グリットから出土したものがそれぞれ接合された。

石材は、砂質凝灰岩、花崗閃緑岩、安山岩質凝灰岩などが多く、12種の石材が使用されている。

これらを擦痕の数で分類すると次のようになる。

a 類 (図版29-170~171、写真24-170~171) 三稜線に擦痕のみられるもので2点出土した。

b 類 (図版29-172~同31-189、写真24-172~同25-189) 二稜線に擦痕のみられるもので19点出土した。

c 類 (図版31-190~同33-233、写真25-190~同26-233) 一稜線にだけ擦痕のみられるもので66点出土し、擦石中最も多い。

なお、前述の接合されたものは、図版31-190、写真25-190と図版32-218、写真26-218の2点である。

円盤状打製石器

269点出土した。本石器の原形は丸味を帯びた礫と思われる。この原礫に、打撃を加え、第一次の剝離を行ない、一面が自然面、その片面に第一次の剝離面を残した円盤状の礫に加工し、さらに、第二次的加工、調整を加え、刃部を形成したものや、第一次の剝離だけで即石器としたものがある。

石材は、長石琺岩 111点、安山岩51点等10種あまりを用いている。

また、これ以外にも、規模、形状から本石器に属すると思われるものがあるが、欠損が著しかったり、使用痕の有無が確認できなかったものは除いた。

なお、図版、写真には、紙数の関係上、範例的に5例だけ両面の実測図、写真を掲載した。

これらを、加工、調整の面から概観すると次のように分類される。

a 類 (図版33-234~同35-255、写真27-234~同28-255) 63点出土した。原礫に数回打撃を加え、円盤状にし、両面に二次的加工を施し刃部を形成したものの。刃部の形成される縁辺は、ほとんどの場合、円盤状に割るために打撃を加えた反対側を使用しているようである。

この中で、図版33-234、写真27-234にみられる1点は、例外的で、両面に自然面を有し、よくみられる半円状偏平打製石器の要素が強いが、一応本石器に一括した。

b 類 (図版35-256~同36-273、写真28-256~同29-273) 104点出土した。一次加工はa類と同様であるが、二次的加工、調整は、自然面のみに施されているもの。

c 類 (図版36-274~279、写真29-274~279) 102点出土した。二次的加工、調整は認められないが、使用痕と思われる痕跡のあるもの。

V. ま と め

以上、本遺跡の発掘調査の結果を概略的に述べたが、これらについて若干のまとめを加えたい。

今回の発掘調査では、検出された遺構が少なかった。特に、直接縄文時代に結びつく遺構は皆無である。もちろん、既述のように、縄文時代の竪穴住居址については検出されないだろうことは、試掘調査の結果からもある程度予測されたことではあった。しかし、縄文時代早、前期に併行する遺物は多量に出土した。そこで、まず、縄文時代の竪穴住居址が検出されなかったことと、多量に出土した遺物との関連について触れてみる。

遺物の出土状況をみると、第1に、土器片は多量に出土したが完形に近いものは1点だけで、他はすべて破片である。第2に、石器も含めた遺物は、出土量の粗密の差はあるものの調査区全域から、しかも、³散乱した状態で出土している。第3に、遺物は、縄文時代早、前期の二時期にわたるが、層位的区分は認められない。さらに、当調査区内は、戦後、二度にわたる大規模な畑地造成が行なわれている。最初の造成の際には、立木を伐採、重機を用い抜根し、表土の一部を剥ぎ取り、二度目の造成の際には、重機によって土壌の逆転を行なっている。剥ぎ取られた表土の一部は、現在も調査区北側の低地に土器状に集積されている。このことは、基本層序第Ⅱ層の状況からも伺われる。以上のことを総合すると、本来、調査区内には、竪穴住居址が存在したが、二度の攪乱によって消滅した可能性も考えられる。なお、試掘調査の際、調査区東方の段丘下の緩斜面(調査区外)からは、数棟の縄文時代の竪穴住居址が検出されている。

次に、焼土の痕跡については、滲透層であるが、現地性の可能性が強い。これも、竪穴住居

址同様、直接焼成を受けた部分は、攪乱によって消失した可能性が強い。しかし、これらが、炉跡であったか否かは不明である。ただ、グリット別土器片出土量図（図版4）と焼土痕の検出位置を対比するならば、焼土痕は、土器片の出土量の多い地区にあるとはいえようである。

土器については、既述のように時期を確定できない2点を除くと縄文時代早、前期に比定されよう。これらを編年上から、第Ⅰ群土器については、器面調整、文様を中心にa～d類に分類した。これに、器形等他の要素を加えてみると若干の時期差がみられるようである。まず、a～c類について、特徴的文様は、口唇部の刻みと口縁部を中心とするつめ形を呈する刺突である。この特徴から、これらは、早期後葉に比定される白浜式土器に併行すると考える。しかし、白浜式土器は、平縁の口縁部をもつのが一般的とされるが、図版15-74、写真13-74に示した1点は波状の口縁部であることが若干の疑問点として残る。また、器面調整の面からは、c類に含めた4点（図版18-114～115、写真16-114～115および図版17-106～107、写真15-106～107）が白浜式土器と特徴を異にする。前者は、外面では、口唇端部に平行沈線、口縁部に格子、斜格子目の文様が施され、内面では、口唇端部に斜格子目の文様がみられる。器形は、口唇まで急角度で外傾しながら立ち上がり、内面は、口縁部が内湾している。口唇部は内削状を呈する。この特徴は、大平式土器に近似する。後者は、口唇の刻みは白浜式土器に近似するが、口縁部にはつめ形の刺突がみられず、横位に走る沈線と割箸状工具による刺突文を持つ。これは、白浜、大平式土器より若干下がる大寺1式土器に近似する。

なお、d類は、両面に縄文が施され、早期末葉に比定される早稲田4類に近似する。

第Ⅱ群土器は、a類については、口縁部のループ文、体部の羽状縄文、繊維を含む等の特徴からは、前期前葉に比定される大木1式土器に近似する。b類は、結束された羽状縄文を持つもの（図版20-145、写真18-145）等、口縁部に縄文を圧痕したもの、体部に組紐回転文を施したもの（図版20-142～143、写真18-142～143）等がみられる。これらには、当遺跡から出土した早期の土器に比し、繊維を多く含む。以上のことから、本類も前期の比較的早い時期に併行すると思われる。

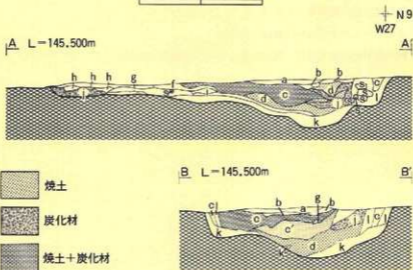
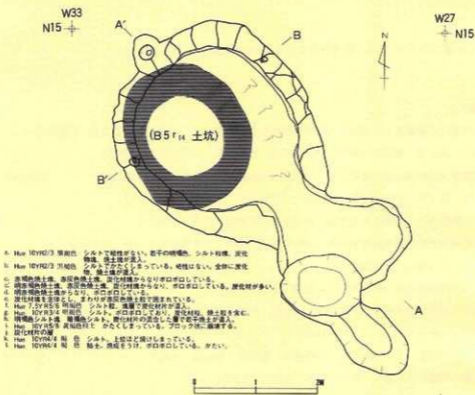
最後に、「円盤状打製石器」について、特に、機能、編年についてみたい。本石器は、当遺跡から出土した石器552点中269点あり全体の49%を占めることは前述したが、現在の段階では出土例は少ない。おそらく、一遺跡でこれほど多量に出土した例は稀であろう。

機能について、本石器に近似する石器を出土した青森県鷹架遺跡の報告では、土掘具としている。筆者も、規模、形状、さらに、石質についても剥片石器等と比較すると軟質の石材であることから妥当と考えるが、本石器の観察からは確定し得ず、他の使用にも供される可能性は十分考えられる。したがって、この点については、今後の出土例を待ち検討されなければならぬだろう。編年について、鷹架遺跡では、出土土器の編年から縄文時代早期後葉から前

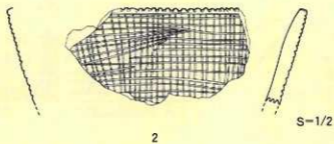
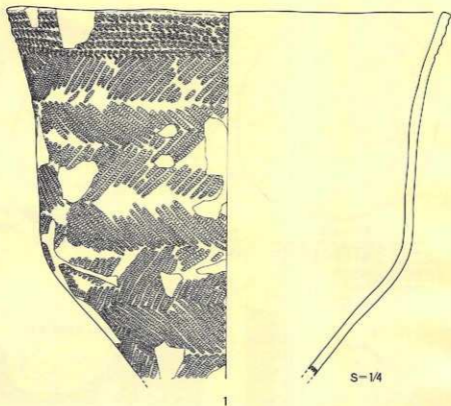
期前葉に位置づけているが、当遺跡のものも同様の位置づけができればよい。

〈参考文献〉

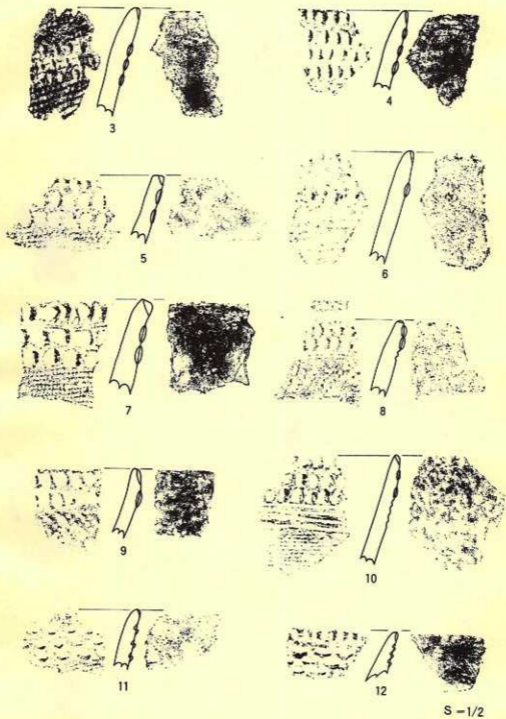
- 青森県埋蔵文化財調査報告書第63集 鷹架遺跡発掘調査報告書 青森県教育委員会 昭和56年
石器時代 第5号 福島県双葉郡大平遺跡略報 竹島国基 石器時代文化研究会
岩手県埋蔵文化財調査報告書第7集 二戸市沢内B遺跡 (財)岩手県埋蔵文化財センター 昭和53年
石器時代 第7号 石器時代文化研究会 1965年
岩手県大槌町吉里吉里崎山弁天遺跡 岩手県大槌町教育委員会 昭和49年
青森県埋蔵文化財調査報告書第53集 大槌町砂沢平遺跡 青森県教育委員会 昭和54年
先史時代 江坂輝弥 日本評論新社
北上山系開発地域土地分類基本調査 田老 岩手県 1973年
縄文土器大成Ⅰ 芹沢長介、坪井清足 講談社 1982年
考古学ジャーナル 13 1967年
縄文文化の研究 3 加藤晋平、小林達雄、藤本強、雄山閑 1982年
図録石器の基礎知識 Ⅲ 鈴木道之助 柏書房 1981年
岩手の土器 岩手県立博物館 1982年
庶光器 8号 みちのく考古学研究会 1974年
壬遺跡 新潟県中魚沼郡中里村 國學院大学考古学研究室 1980年



図版 5 B5q₁₄ 炭窯跡



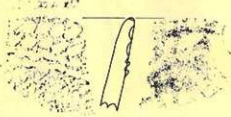
图版 7 土器实测图



图版 8 土器片拓影图 1



13



14



15



17



16



18



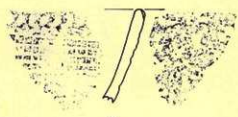
19



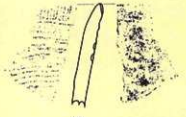
20



21



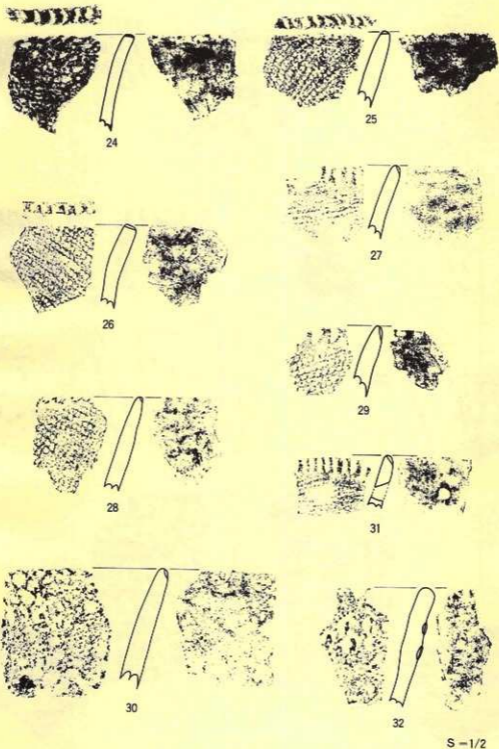
23



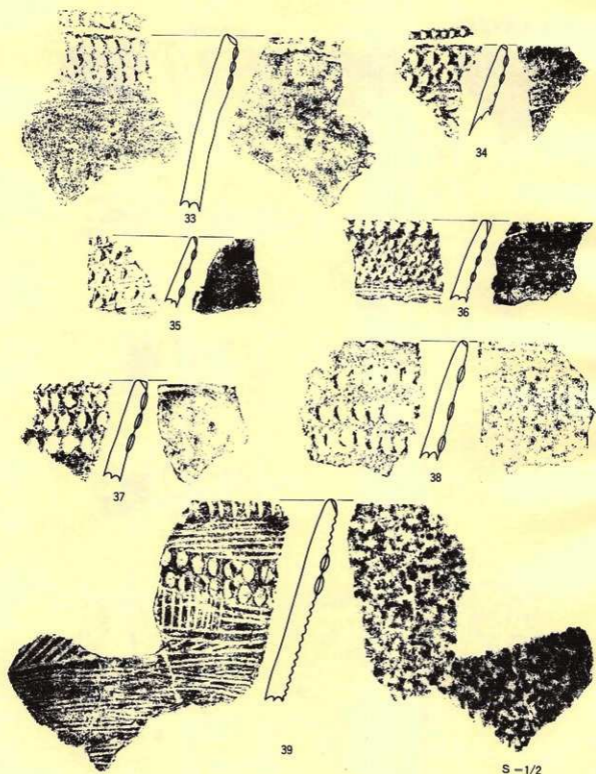
22

S-1/2

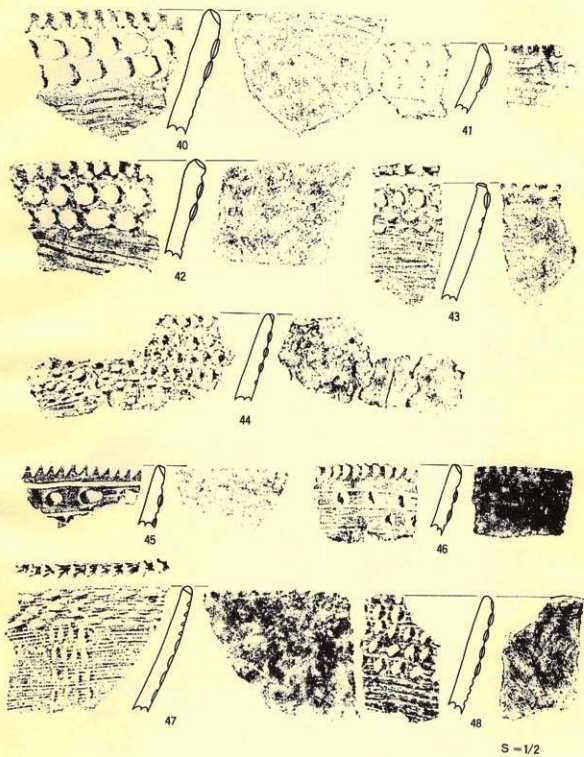
图版 9 土器片拓影图 2



图版10 土器片拓影图 3

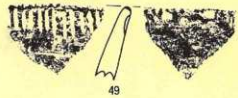


图版11 土器片拓影图4

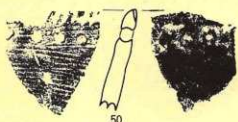


图版12 土器片拓影图 5

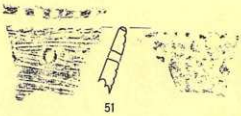
拓片



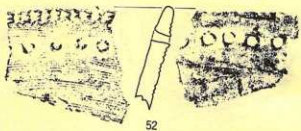
49



50



51



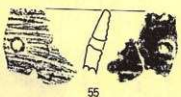
52



53



54



55



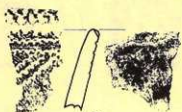
56



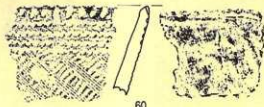
57



58



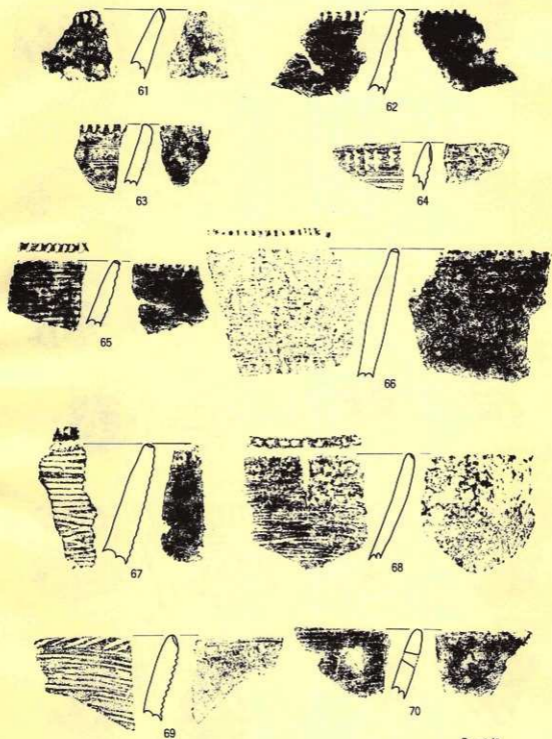
59



60

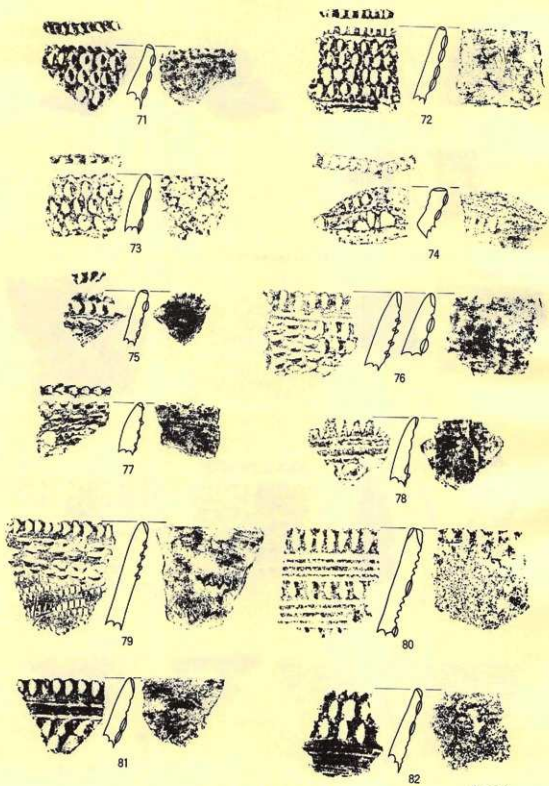
S-1/2

图版13 土器片拓影图6



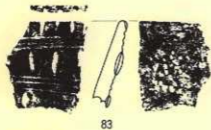
S-1/2

图版14 土器片拓影图 7

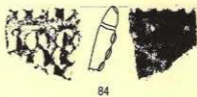


图版15 土器片拓影图 8

S-1/2



83



84



85



86



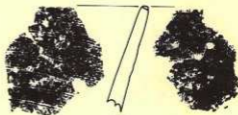
87



88



89



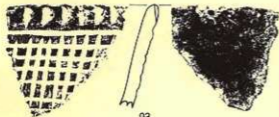
90



91



92



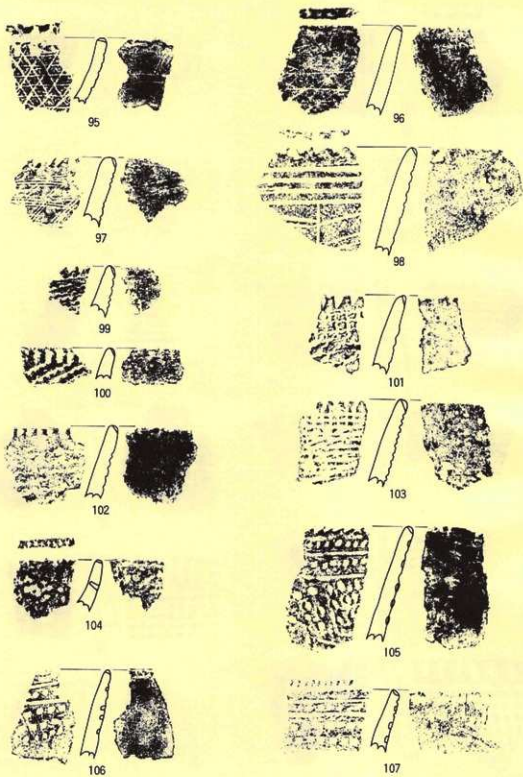
93



94

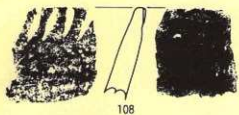
S-1/2

图版16 土器片拓影图9

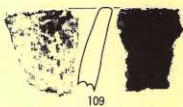


S-1/2

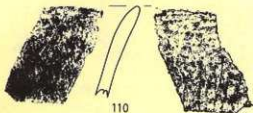
图版17 土器片拓影图10



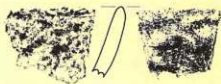
108



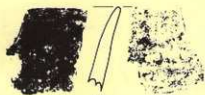
109



110



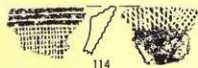
111



112



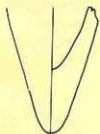
113



114



115



116



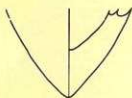
117



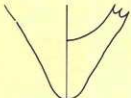
118



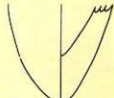
119



120



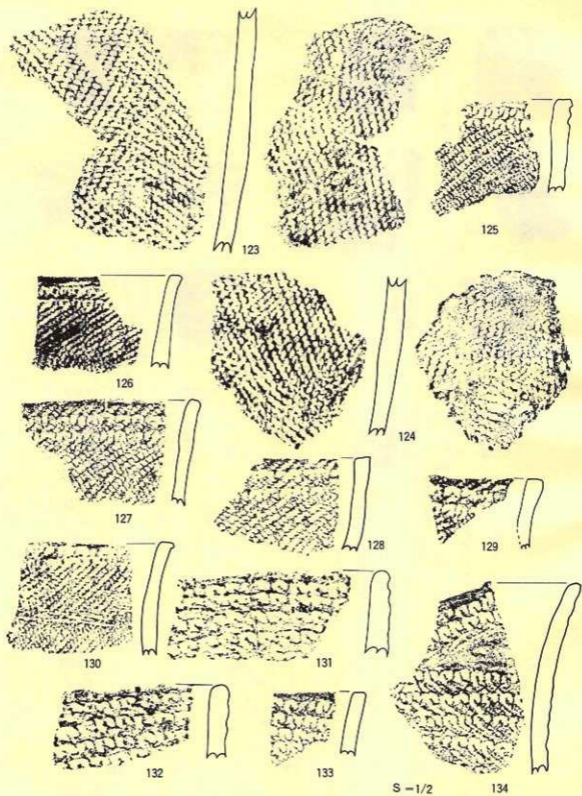
121



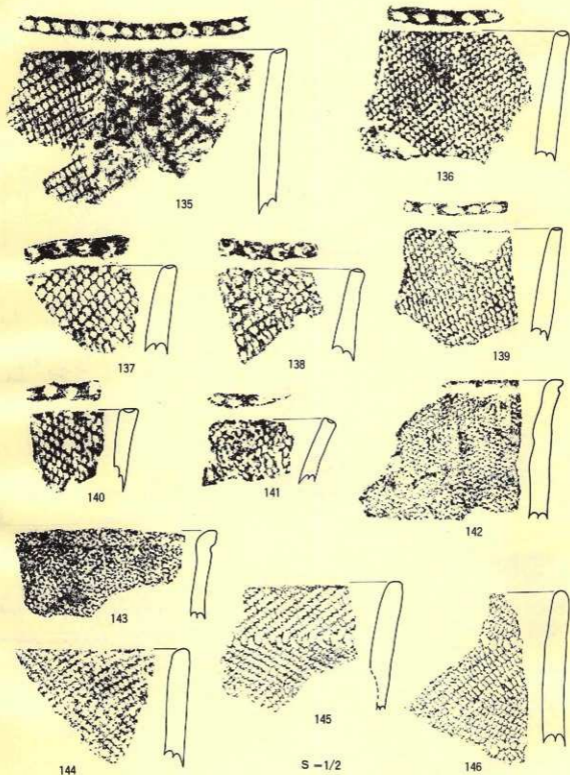
122

S-1/2

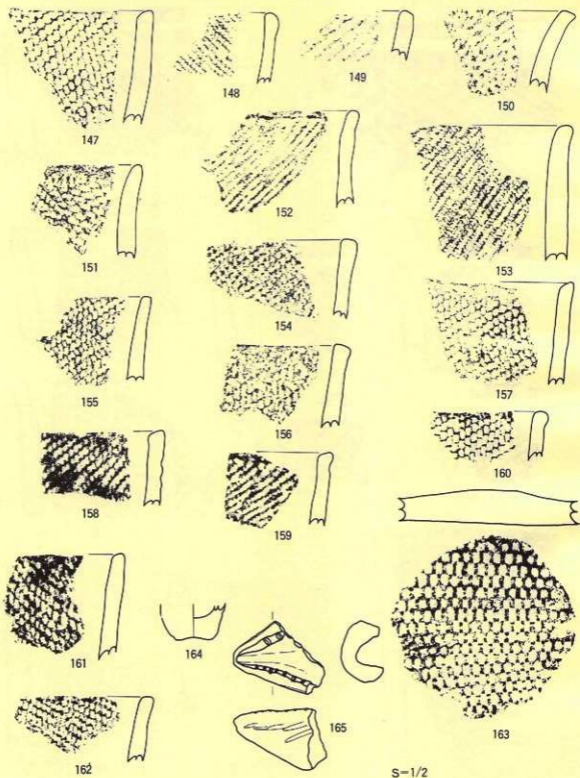
图版18 土器片拓影图11



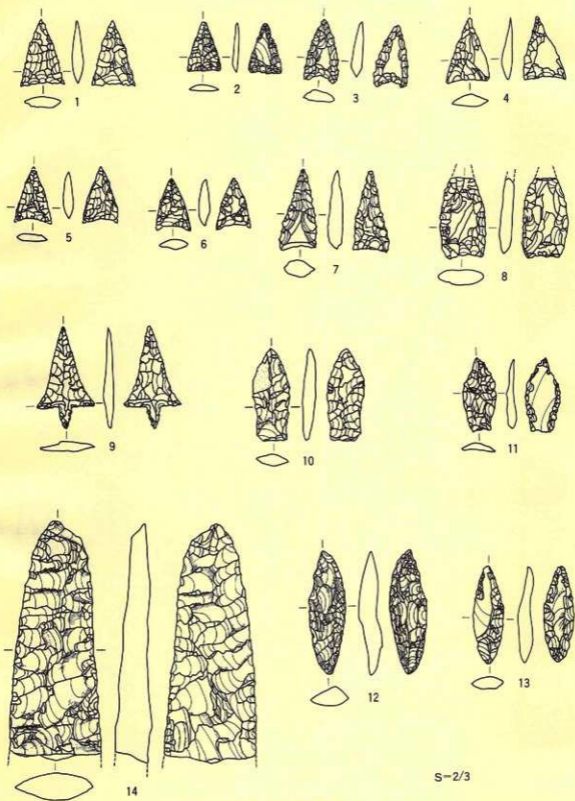
图版19 土器片拓影图12



图版20 土器片拓影图13

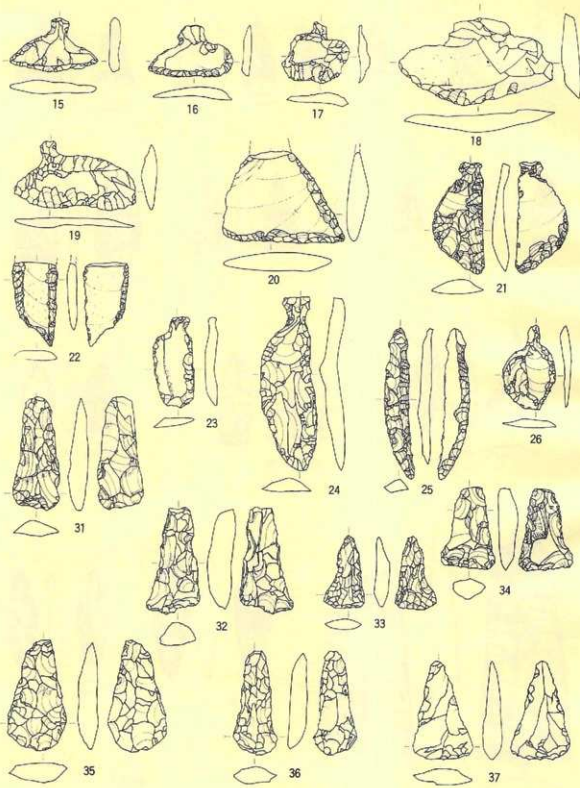


图版21 土器片拓影图14



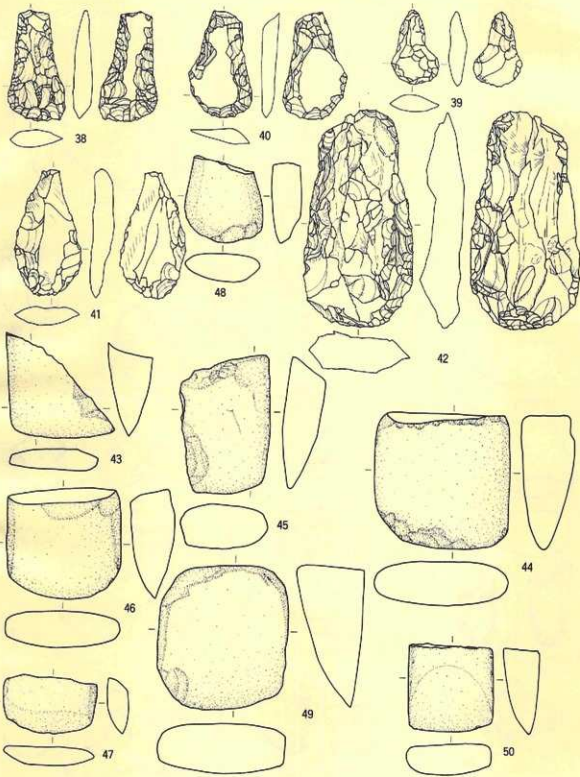
S-2/3

图版22 石器实测图 1



图版23 石器实测图 2

S-1/2

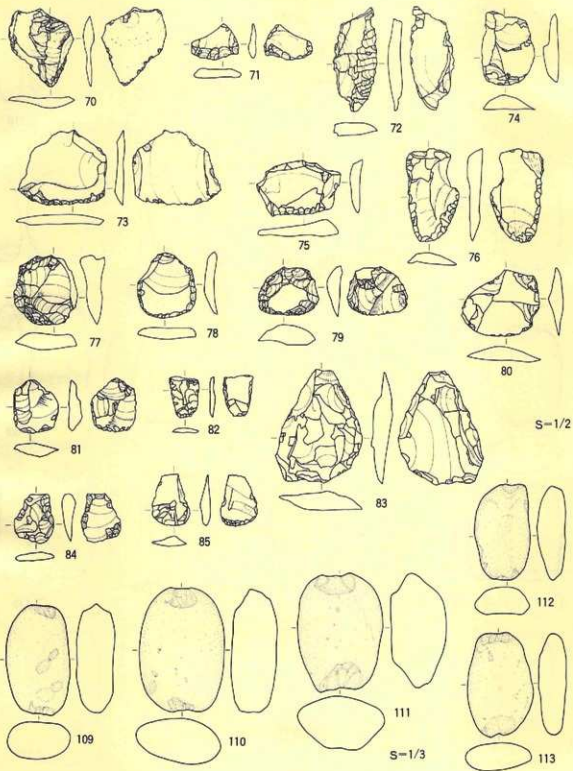


S-1/2

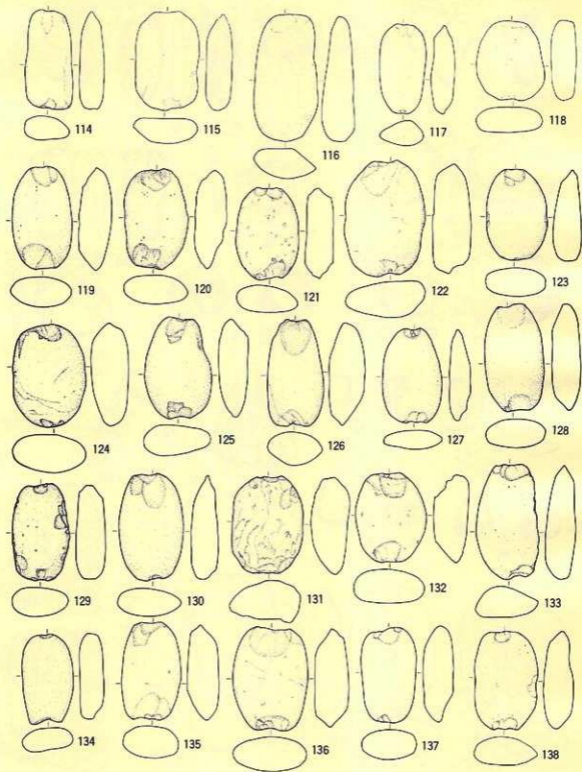
图版24 石器实测图 3



图版25 石器实测图 4

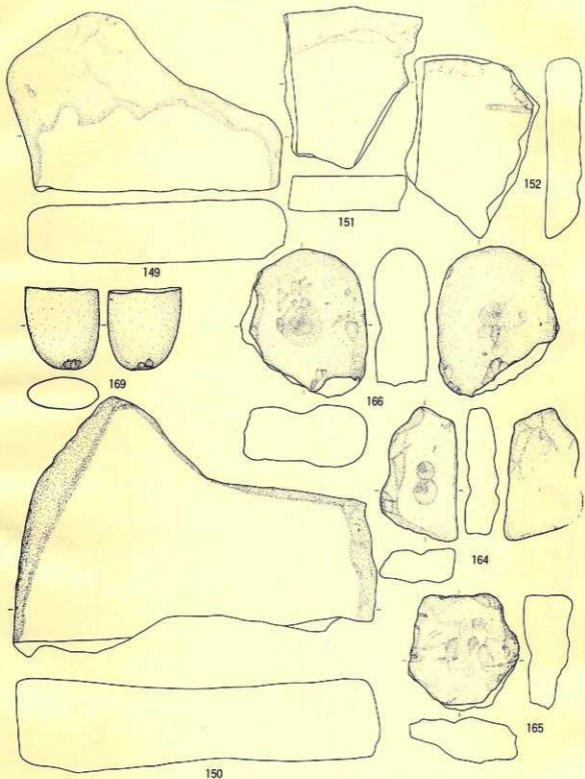


图版26 石器实测图 5



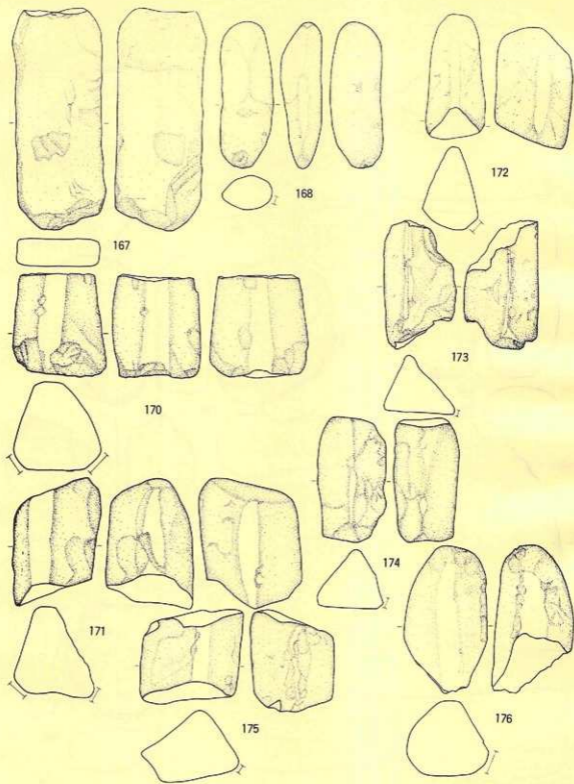
图版27 石器实测图 6

S-1/3



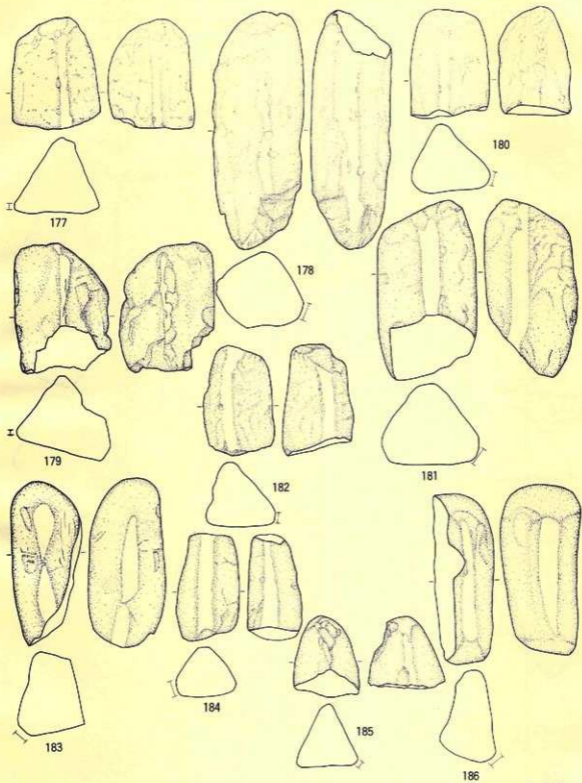
图版28 石器实测图7

S-1/3



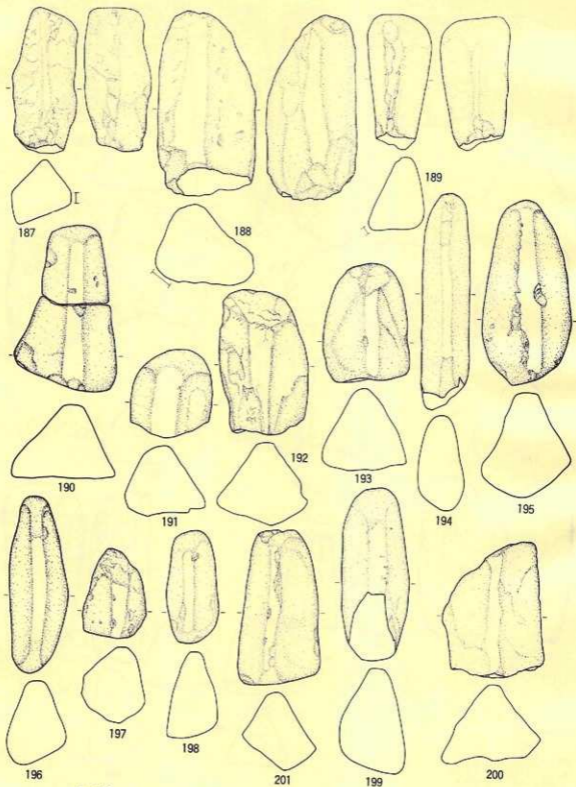
图版29 石器实测图 8

S-1/3



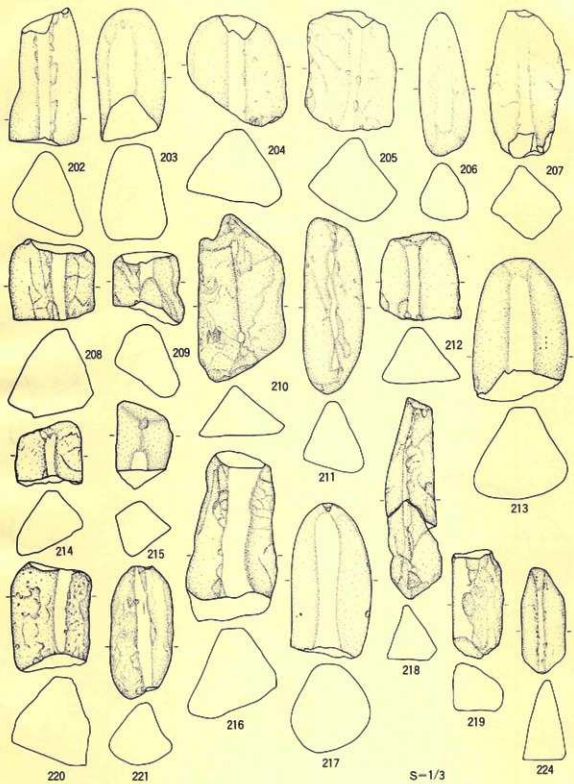
S-1/3

图版30 石器实测图 9

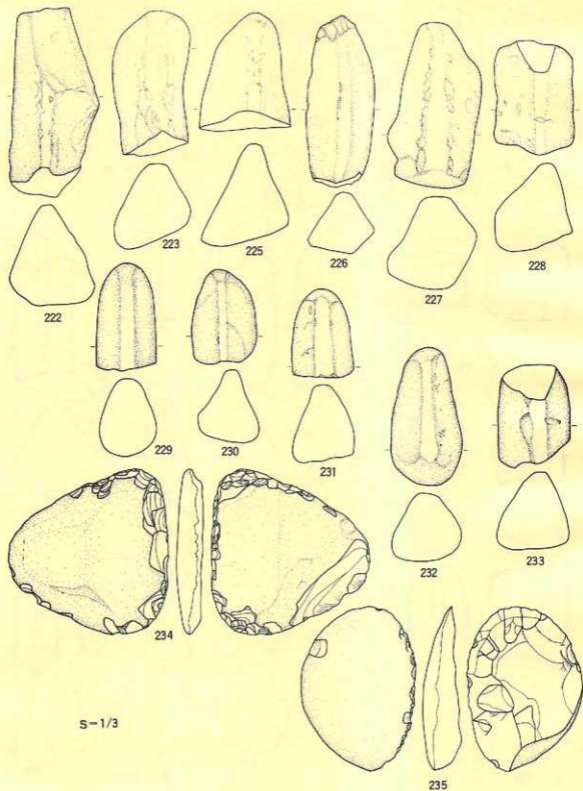


S-1/3

图版31 石器实测图10

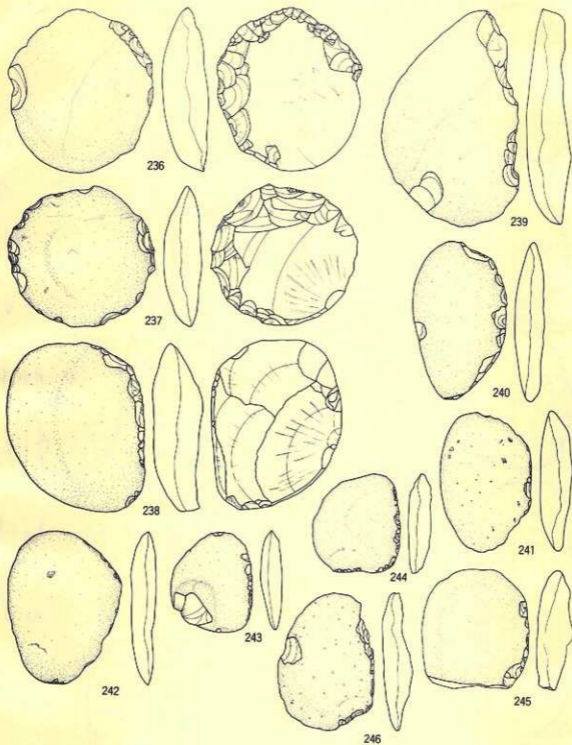


图版32 石器实测图11



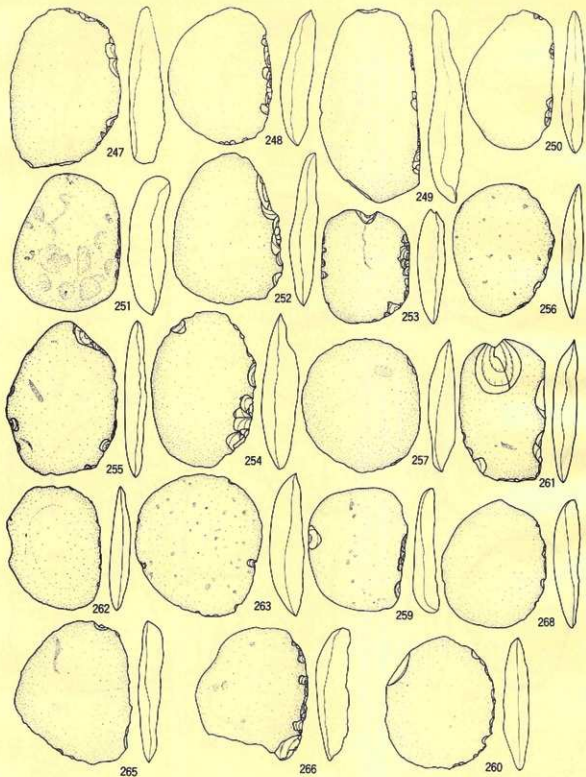
S-1/3

图版33 石器实测图12



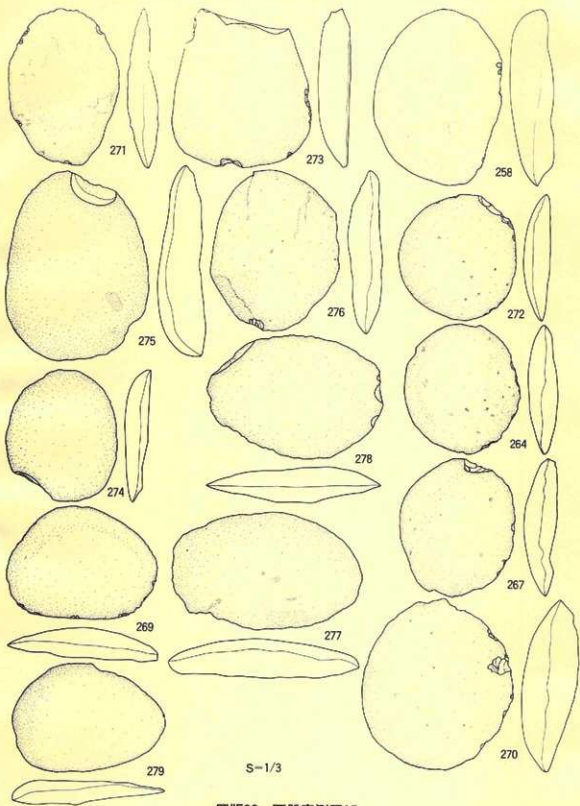
S-1/3

图版34 石器实测图13



S-1/3

图版35 石器实测图14



图版36 石器实测图15

遺跡全景
(調査前)



遺跡全景
(調査後)

発掘作業
(遺構検出)



写真 1



遺物出土状況 1



遺物出土状況 2

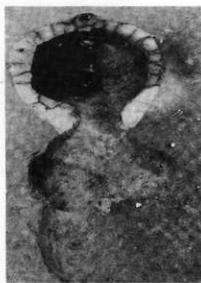


深掘断面 1



深掘断面 2

写真 2



B5q₁₄ 炭窯跡全景



B5q₁₄ 炭窯断面1



B5q₁₄ 炭窯断面2



B5r₁₃ 土坑全景

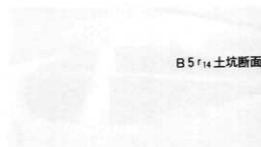


B5r₁₃ 土坑断面

写真3



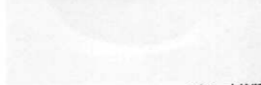
B5 r₁₄ 土坑全景



B5 r₁₄ 土坑断面



C6 g₀₂ 土坑全景



C6 g₀₂ 土坑断面

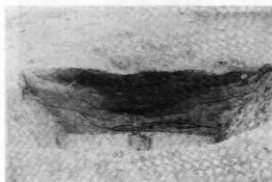


写真 4



S-1/4

1



S-1/2

2

写真5 土器

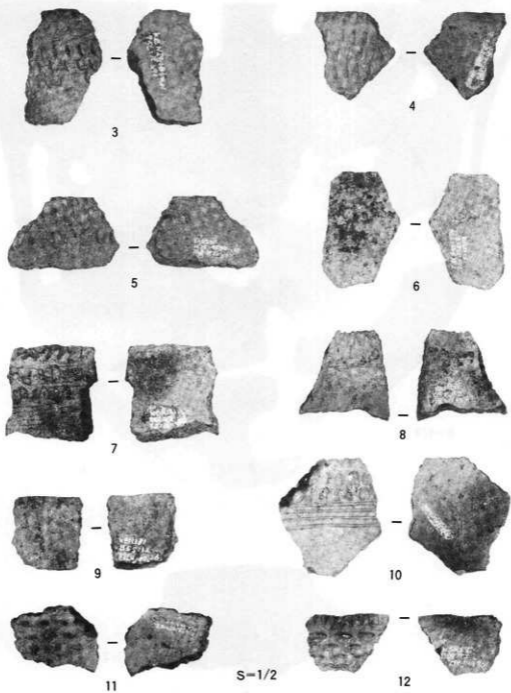


写真6 土器片1

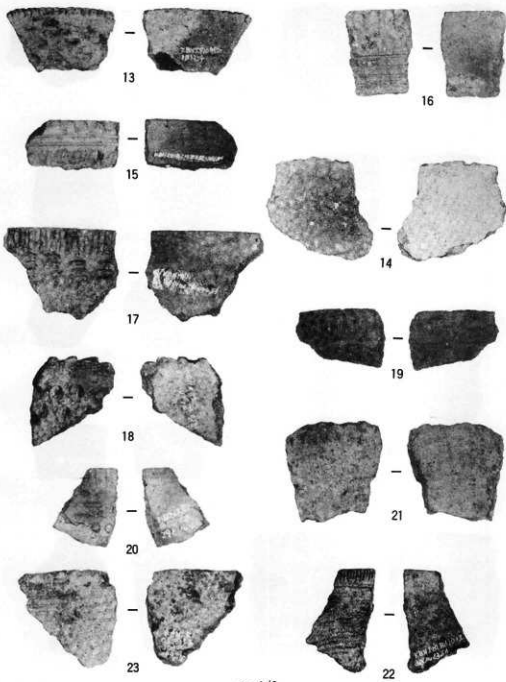
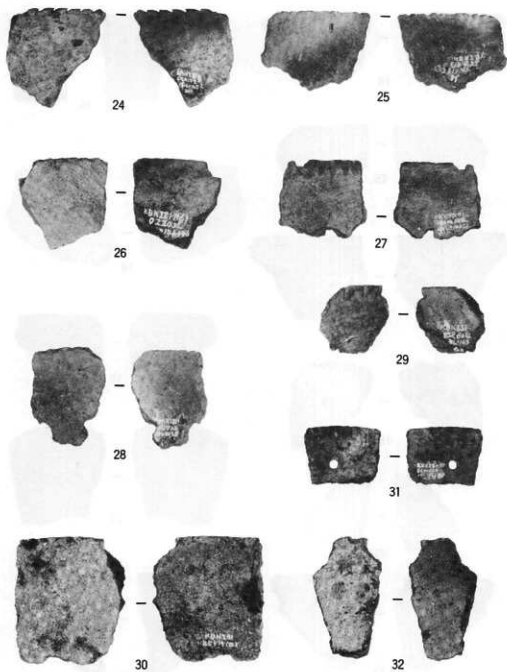


写真7 土器片2



S-1/2

写真 8 土器片 3

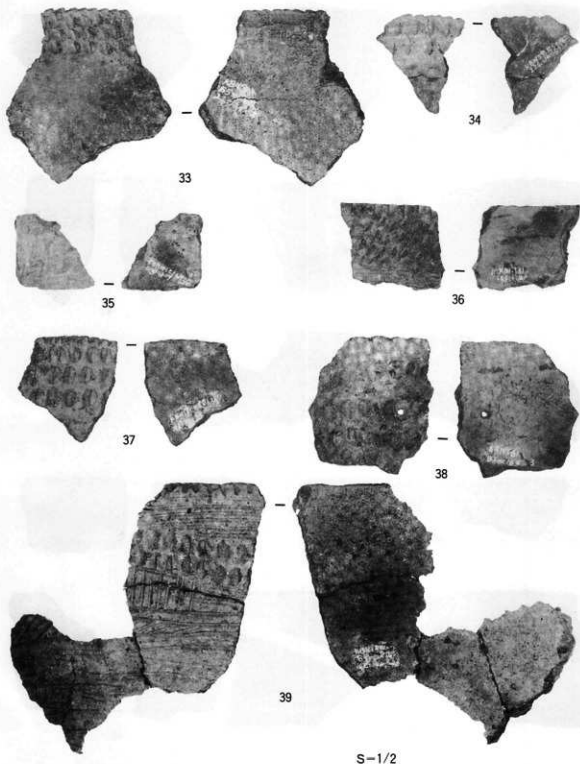


写真9 土器片4

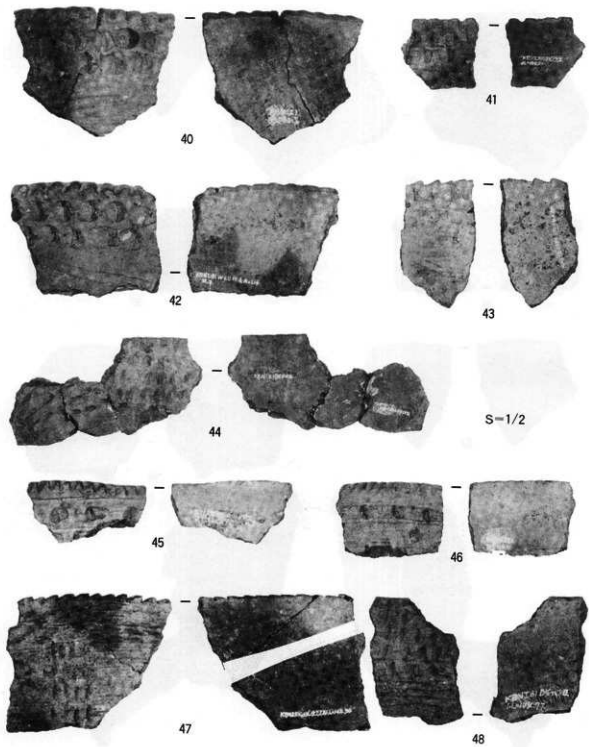
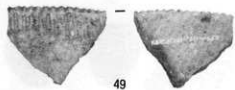
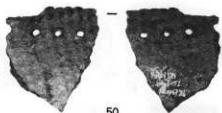


写真10 土器片 5



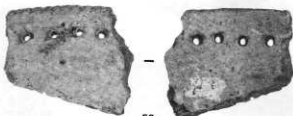
49



50



51



52



53



54



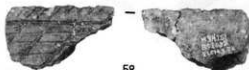
55



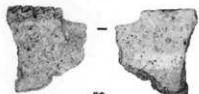
56



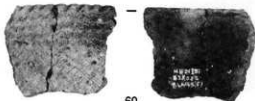
57



58



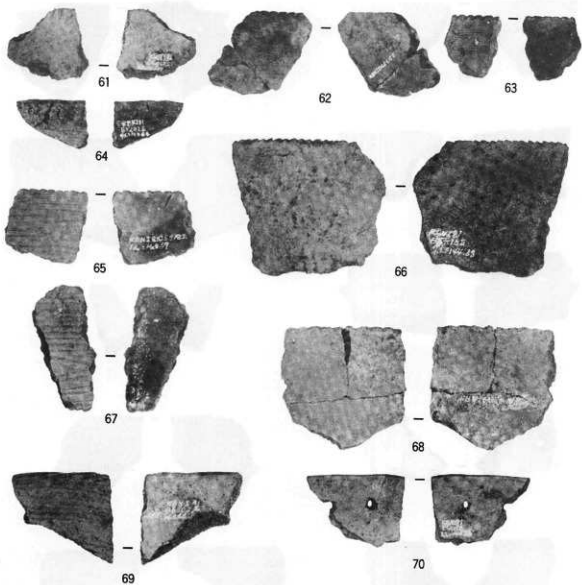
59



60

S-1/2

写真11 土器片 6



S-1/2

写真12 土器片7



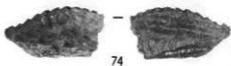
71



72



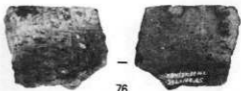
73



74



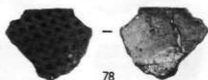
75



76



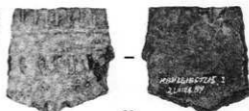
77



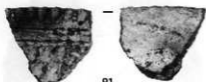
78



79



80



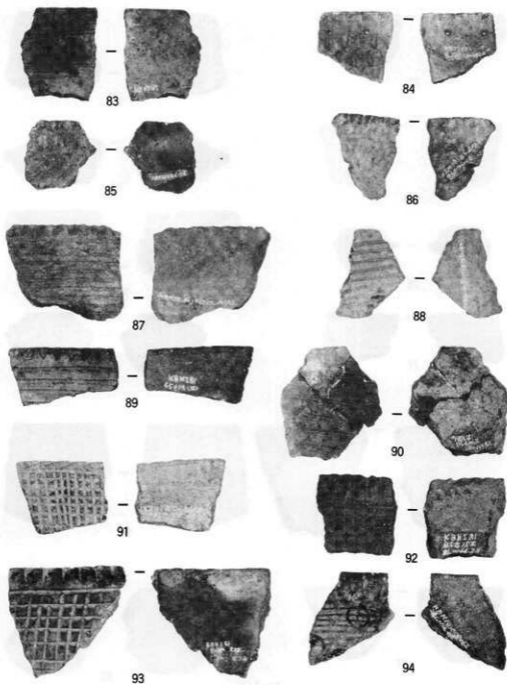
81



82

S-1/2

写真13 土器片 8

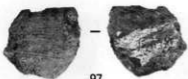


S-1/2

写真14 土器片 9



95



97



99



100



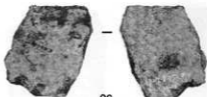
102



104



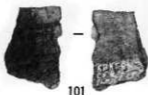
106



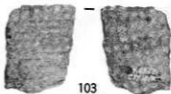
96



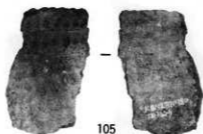
98



101



103



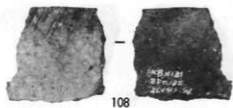
105



107

S-1/2

写真15 土器片10



108



109



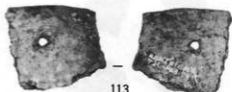
110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



120



121



122

S-1/2

写真16 土器片11

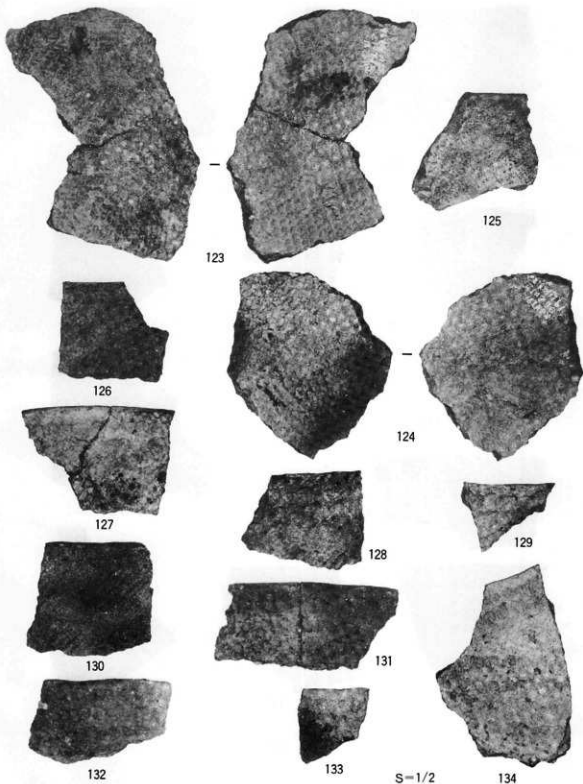
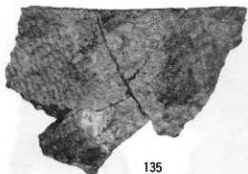


写真17 土器片12



135



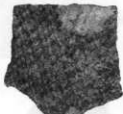
136



137



138



139



140



141



142



143



144



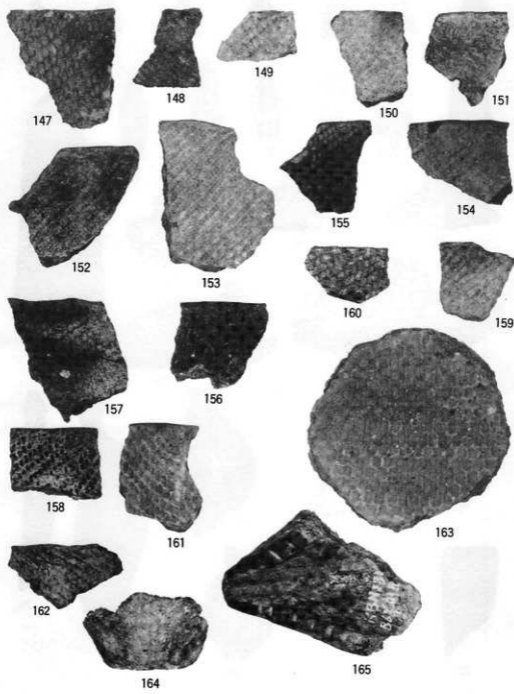
145



146

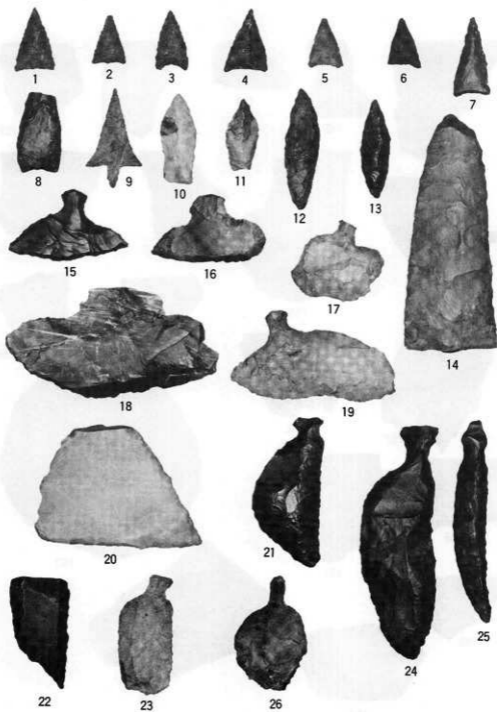
S-1/2

写真18 土器片13



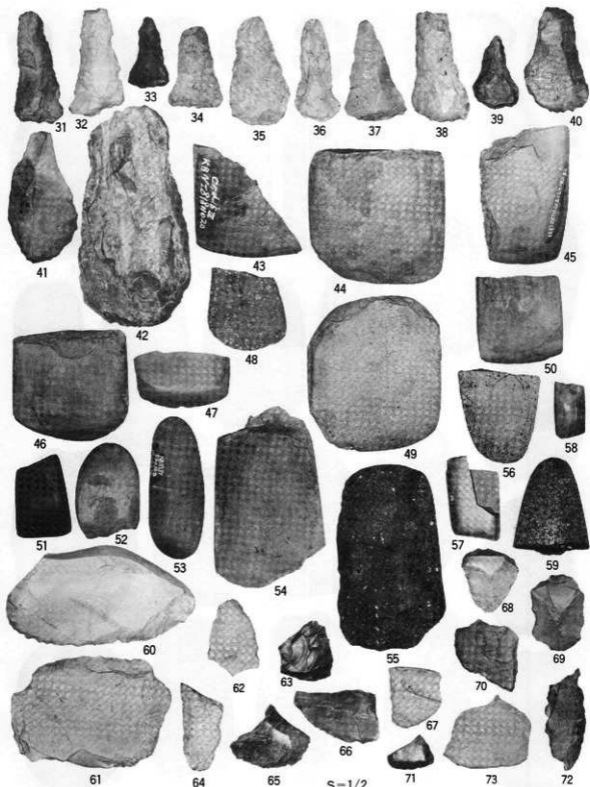
S-1/2

写真19 土器片14



S-2/3

写真20 石器 1



S-1/2

写真21 石器 2

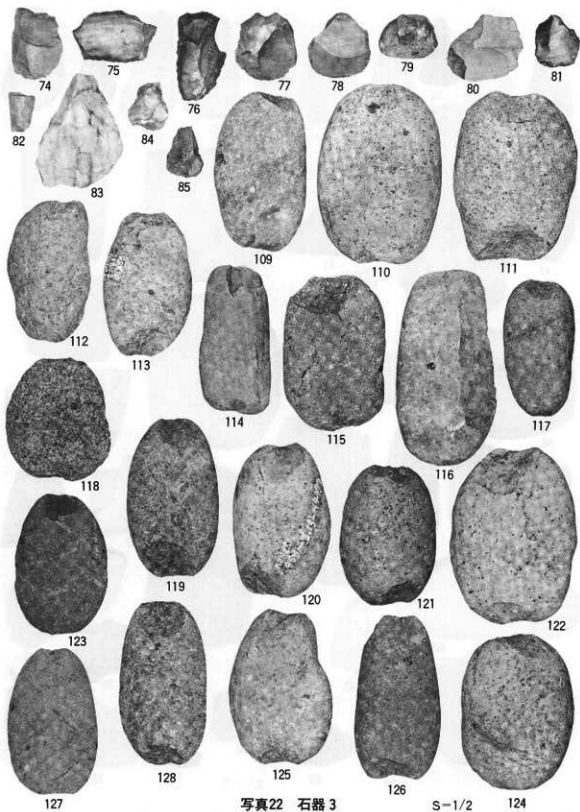


写真22 石器 3

S-1/2

124

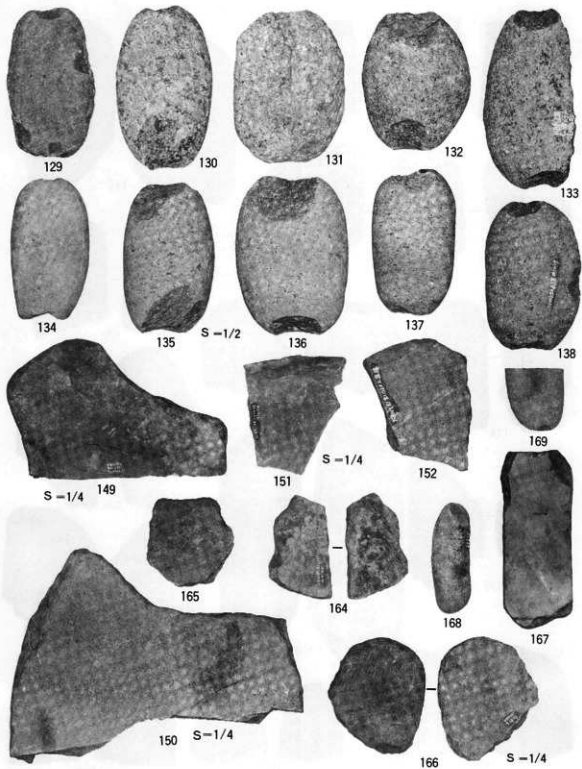


写真23 石器4

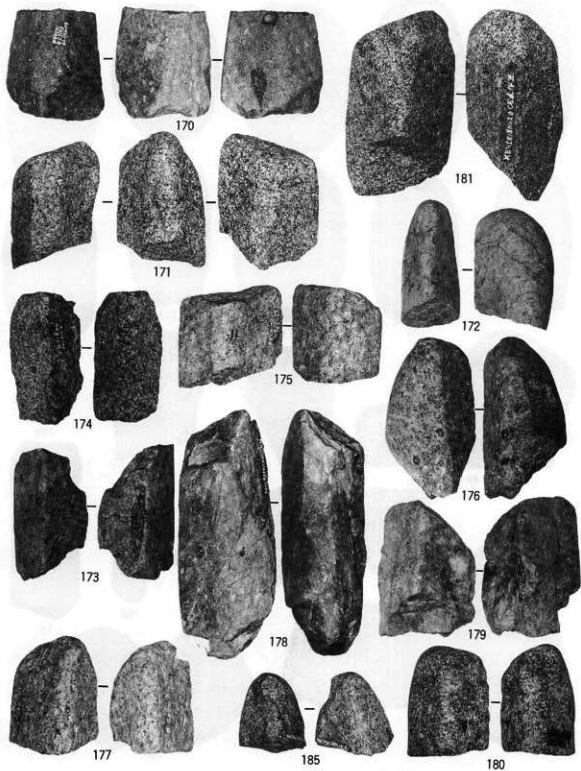
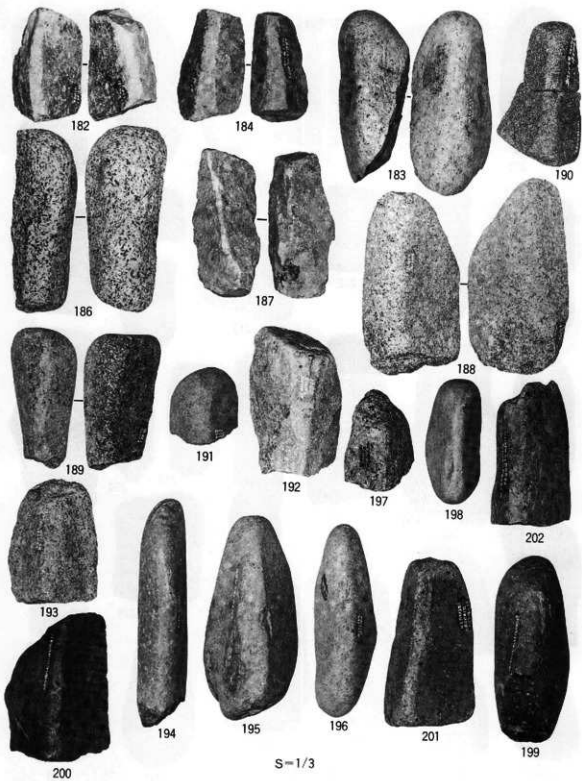


写真24 石器 5



S-1/3

写真25 石器 6

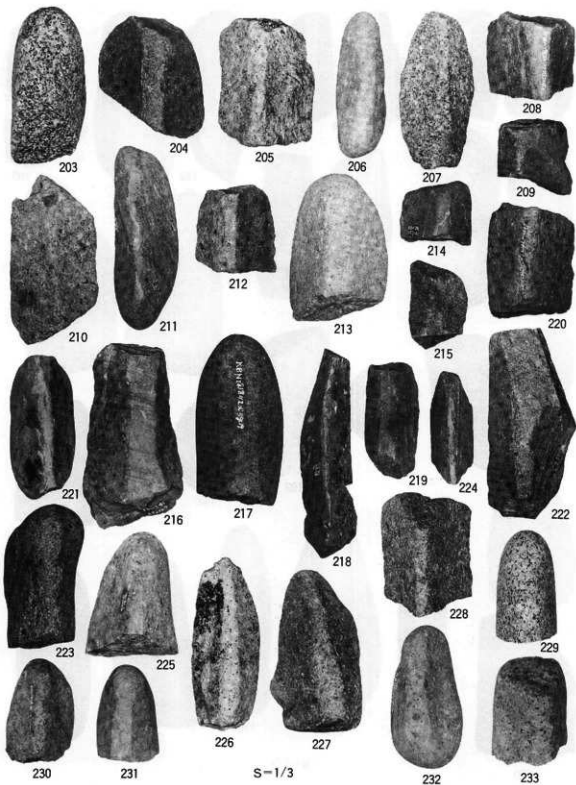


写真26 石器 7

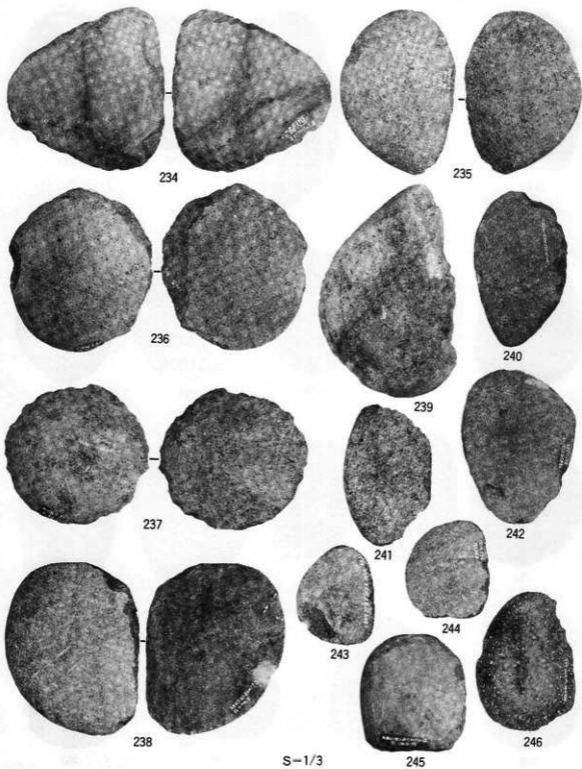


写真27 石器 8

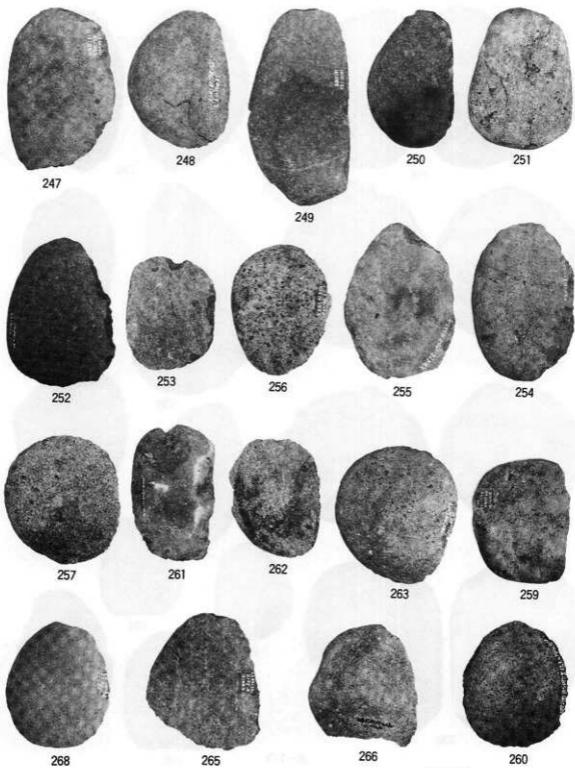


写真28 石器9



271



273



258



275



276



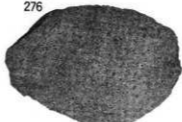
272



264



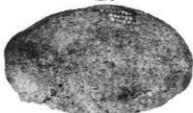
274



278



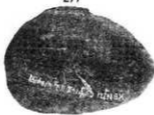
267



277



269



279



270

S-1/3

写真29 石器10

岩手県埋文センター文化財調査報告書第52集

小堀内 I 遺跡発掘調査報告書
田老大規模年金保養基地関連遺跡発掘調査

印刷 昭和58年2月23日

発行 昭和58年2月28日

発行 財団法人岩手県埋文センター
〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
電話 0196 (38) 9001 (代)

印刷 河北印刷株式会社
〒020 盛岡市本町通二丁目8-7
電話 0196 (23) 4256
©岩手県埋文センター1983
